

茨城県教育財団文化財調査報告第401集

大谷貝塚 3

国道125号大谷バイパス建設事業
に伴う埋蔵文化財調査報告書4

平成27年3月

茨城県竜ヶ崎工事事務所
公益財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第401集

お お や か い づ か
大 谷 貝 塚 3

国道125号大谷バイパス建設事業
に伴う埋蔵文化財調査報告書4

平成27年3月

茨城県竜ヶ崎工事事務所
公益財団法人茨城県教育財団

序

茨城県では、21世紀の社会を展望し、県全域にわたる調和のとれた発展を図るために、県内の交通体系の整備を積極的に進めています。

このような中、千葉県から茨城県、そして埼玉県へと伸びる広域な幹線道路であり、産業や経済活動を支える動脈として極めて重要な役割を果たしている国道125号について、近年市街地域で発生している交通渋滞の解消と、周辺環境の向上等を目的に、大谷バイパスの建設が計画されました。

しかしながら、この事業予定地内には埋蔵文化財包蔵地である大谷貝塚が所在することから、これを記録保存する必要があるため、当財団が茨城県竜ヶ崎工事事務所から委託を受け、平成18年度から20年度、25年度にかけてその発掘調査を実施しました。そのうち、平成18・19年度の調査成果は『文化財調査報告』第317集として、平成20年度の調査成果は『文化財調査報告』第330集として刊行したところです。

本書は、平成25年度の調査成果を収録したものです。本書が、学術的な研究資料としてはもちろんのこと、郷土の歴史に対する理解を深めるために活用されることによりまして、教育・文化の向上の一助となれば幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者であります茨城県竜ヶ崎工事事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、美浦村教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対しまして深く感謝申し上げます。

平成27年 3月

公益財団法人茨城県教育財団

理事長 鈴木 欣一

例 言

- 1 本書は茨城県竜ヶ崎工事事務所の委託により、公益財団法人茨城県教育財団が平成25年4月1日から6月28日まで発掘調査を実施した、茨城県稲敷郡美浦村大谷965-2番地ほかに所在する大谷貝塚の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は、以下のとおりである。
調査 平成25年4月1日～6月28日
整理 平成26年4月1日～7月31日
- 3 発掘調査は、調査課長白田正子のもと、以下の者が担当した。
首席調査員兼班長 綿引英樹
次席調査員 小川貴行
次席調査員 木村光輝
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長後藤一成のもと、次席調査員木村光輝が担当した。

凡 例

- 1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し、 $X = + 240 \text{ m}$ 、 $Y = + 43,200 \text{ m}$ の交点を基準点 (C 3a) とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々 40 m 四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々 10 等分し、4 m 四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へ A、B、C…、西から東へ 1、2、3… とし、「A1区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へ a、b、c…j、西から東へ 1、2、3、…0 と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A1a1区」のように呼称した。

- 2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 P-ピット PG-ピット群 SD-溝跡 SF-道路跡 SI-堅穴建物跡
SK-土坑 UP-地下式坑

遺物 DP-土製品 M-金属製品 Q-石器・石製品 TP-拓本記録土器

土層 K-撹乱

- 3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構配置図は 400 分の 1、遺構全体図は 800 分の 1、各遺構の実測図は原則として 60 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は、原則として 3 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

 焼土・赤彩  炉・火床面・繊維  竈部材・黒色処理  煤
●土器 ○土製品 □石器・石製品 - - - 硬化面

(4) 従来、堅穴住居跡としていた遺構について、平成 25 年度から堅穴建物跡に名称を変更したことにより、略号 SI は堅穴建物跡とする。なお、財団調査報告第 317 集において堅穴建物跡 (略号 ST) として報告された遺構は、居住施設よりも作業施設の可能性が高いものと捉えている。

- 4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。また、土層解説中の含有物については、各々総量を記述した。

- 5 遺構一覧表・遺物観察表の表記は、次のとおりである。

(1) 計測値の単位は m、cm、g で示した。なお、現存値は () を、推定値は [] を付して示した。

(2) 遺物観察表の備考の欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

- 6 堅穴建物跡の「主軸」は、炉・竈を通る軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸 (径) 方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した (例 N - 10° - E)。

- 7 今回の報告分で、調査段階での遺構名を変更したものと及び欠番にしたものは以下のとおりである。

変更 SD11→SD11A・B・C、SD19→SF 6、SD25→SD25A・B、SD28→SK897、SK790→UP 1、SK793→第1号堅穴遺構 (SK903)、SK839・838・835→第2・3・4号陥穴、SK903→SK793、SK877・878→PG 6 P 3・4

欠番 SD20・21、SK797・807・853

目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
概 要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	3
第2章 位置と環境	4
第1節 位置と地形	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の成果	10
第1節 調査の概要	10
第2節 基本層序	10
第3節 遺構と遺物	13
1 縄文時代の遺構と遺物	13
(1) 陥し穴	13
(2) 土坑	15
2 弥生時代の遺構と遺物	24
(1) 竪穴建物跡	24
(2) 土坑	32
3 古墳時代の遺構と遺物	34
(1) 竪穴建物跡	34
(2) 溝跡	41
4 室町時代の遺構と遺物	43
(1) 地下式坑	43
(2) 溝跡	44
(3) 土坑	45
5 その他の遺構と遺物	46
(1) 竪穴建物跡	46
(2) 竪穴遺構	49
(3) 溝跡	50
(4) 道路跡	53
(5) 土坑	54

(6) ビット群	66
(7) 遺構外出土遺物	70
第4節 まとめ	76
写真図版	PL 1～PL10
抄 録	

大谷貝塚の概要

遺跡の位置と調査の目的

大谷貝塚は、美浦村のほぼ中央部に位置し、高橋川左岸の標高 20～25m の台地上に立地しています。

国道 125 号大谷バイパス建設事業に伴い、遺跡の内容を図や写真に記録して保存するため、茨城県教育財団が平成 18～20 年度の第 1～3 次発掘調査に続いて、平成 25 年度に第 4 次発掘調査を行いました。



調査の内容

今回は 3,000㎡ を調査しました。調査の結果、^{たてあな}堅穴建物跡 8 棟（^{やよい}弥生・^こ古墳・時期不明）、^{おとあな}堅穴遺構 1 基（時期不明）、^{あな}陥し穴 3 基（^{じゅうもん}縄文）、^{ちかしきこう}地下式坑 1 基（^{室町}室町）、^{溝跡}溝跡 24 条（^{古墳・室町・時期不明}古墳・室町・時期不明）、^{道路跡}道路跡 4 条（時期不明）、^{土坑}土坑 107 基（^{縄文・弥生・時期不明}縄文・弥生・時期不明）、^{ピット群}ピット群 5 か所（時期不明）を確認しました。主な出土遺物は、^{縄文土器}縄文土器、^{弥生土器}弥生土器、^{土師器}土師器、^{須恵器}須恵器、^{土師質土器}土師質土器、^{陶器}陶器、^{磁器}磁器、^{土製品}土製品、^{石器}石器、^{石製品}石製品、^{鉄製品}鉄製品などです。



大谷貝塚第 4 次調査区全景（南側から）



弥生時代の大型竪穴建物跡



古墳時代の竪穴建物跡の調査の様子



第1号地下式坑の調査の様子



出土した土器・土製品

調査の結果

弥生時代後期後半の集落跡では、1辺8mほどの大型建物跡1棟と、小型の建物跡2棟で構成される小集団が確認できました。前回の調査で確認された中期末～後期前葉の集落跡とは、時期の異なる小規模の集落が営まれていたことが分かりました。

古墳時代の竪穴建物跡では、竈^{かまど}が導入された頃の人々の様子を知ることができました。建物跡から見つかった滑石の荒割り片や剥片からは、建物廃絶時にそれらを撒くという祭祀^{まつり}的な行為が想定できます。類似例は、当貝塚周辺の遺跡でも確認されており、関連性があると考えられます。

室町時代の地下式坑や溝跡等も確認しました。中世以降、墓制や信仰に関する遺構、交通や生産・生活に関する遺構が、今回の調査区域まで広がっていた可能性があります。

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

茨城県竜ヶ崎工事事務所（平成20年3月まで茨城県竜ヶ崎土木事務所）は、首都圏全体の発展と交通の円滑化を図るために国道125号大谷バイパス建設事業を進めている。

平成16年7月20日、茨城県竜ヶ崎土木事務所長は茨城県教育委員会教育長あてに、国道125号大谷バイパス建設事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成23年9月26日及び平成24年3月21日に現地踏査を、平成24年4月6・12日に試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。平成24年4月20日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県竜ヶ崎工事事務所長あてに、事業地内に大谷貝塚が存在すること及びその取扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

平成25年2月7日、茨城県竜ヶ崎工事事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第94条の規定に基づき、土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、現状保存が困難であることから記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、平成25年2月19日、茨城県竜ヶ崎工事事務所長あてに、工事着工前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成25年2月20日、茨城県竜ヶ崎工事事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに、国道125号大谷バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書を提出した。平成25年2月20日、茨城県教育委員会教育長は茨城県竜ヶ崎工事事務所長あてに、大谷貝塚について、発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として公益財団法人茨城県教育財団を紹介した。

公益財団法人茨城県教育財団は、茨城県竜ヶ崎工事事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成25年4月1日から6月28日まで発掘調査を実施した。

第2節 調査経過

大谷貝塚の調査は、平成25年4月1日から6月28日までの3か月間にわたって実施した。以下、その概要を表で記載する。

工程 \ 期間	4月	5月	6月
調査準備 遺構確認	■		
遺構調査		■	■
遺物洗浄 写真整理	■	■	■
撤収			■

第2章 位置と環境

第1節 位置と地形

大谷貝塚は、茨城県の南部、霞ヶ浦南岸の稲敷郡美浦村大谷965-2番地ほかに所在している。

美浦村は、北西に筑波山を、北に霞ヶ浦を望む標高30m以下の比較的低い台地と低地からなっている。台地は筑波・稲敷台地と呼ばれ、千葉県北部から茨城県南部に広がる常総台地の一部を形成している。この台地は数多くの河川によって開析され、樹枝状の入り組んだ複雑な地形を形づくっている。低地は河川流域に発達したものと、霞ヶ浦沿岸の標高1~3mほどの低湿地帯からなっている。主な河川は、阿見町北域を水源とし、南東に流れて美浦村舟子で霞ヶ浦に注ぐ清明川と、美浦村興津さんげ池を水源とし、周囲の谷戸地からの湧水を集めて霞ヶ浦に注ぐ高橋川である。これらの河川に沿って発達している沖積低地は、標高10~20mほどで、ほとんどが谷津田となっている。

台地の地質は、下部から第四紀洪積世下総層群下部の地蔵堂層・叢層、最終間氷期に形成された古東京湾に埋積した下総層群上部の成田（青灰色シルト）層、これを覆う常総層下部の竜ヶ崎層、常総層上部の箱根山の噴火による常総粘土層、その上部には関東ローム層が堆積し、最上部は沖積世沖積層となっている¹⁾。

当貝塚は、村域のほぼ中央部、村立大谷小学校から北に約800mの地点に所在し、高橋川左岸の標高20~25mの台地縁辺部から台地上にかけて立地している。この台地は南北約240m、東西約160mで、北側と南側は沖積低地で、西側には南側の沖積低地から分岐した小規模ながら急傾斜の埋没谷が、中央部には南側の沖積低地から分岐した緩傾斜の埋没谷が北に入り込んでいる。その結果、台地は幅の広い馬蹄形を呈し、河川の後背湿地や谷津田に面した高燥な土地となっている。また、台地周辺は、高橋川によって開析された標高10~20mの沖積低地に囲繞され、台地との比高は5~10mである。

第2節 歴史的環境

当貝塚（1）は、縄文時代から近世に至るまで断続的に土地利用された複合遺跡である。霞ヶ浦をはじめとして、河川、低地、台地といった変化に富んだ自然環境の美浦村は、水利の便に富み、樹枝状に入り込んだ低地と台地が織りなす複雑な地形により、人々の生活や生業、交通の要所となってきた。それを裏付けるように当貝塚の周辺には、後期旧石器時代から近世までの遺跡が数多く確認されている。ここでは、平成18~20年度調査の成果を踏まえながら、当貝塚に関連する遺跡を中心に、時代ごとに概観する²⁾。

当貝塚周辺における旧石器時代の遺跡は、霞ヶ浦沿岸の鳥状に独立した台地上や筑波・稲敷台地に連なる台地上にみることができる。代表的な遺跡としては、ナイフ形石器が出土した陸平貝塚³⁾や石器集中地点が確認された陣屋敷遺跡⁴⁾、根本遺跡⁵⁾がある。その他、ナイフ形石器文化から有舌尖頭器文化までの各時期の石器群が、当貝塚をはじめ、陸平貝塚、花立遺跡⁶⁾、御茶園遺跡⁷⁾（47）、沢田古墳群（2）、興津白井遺跡⁸⁾、原遺跡（37）等から出土している。当貝塚でも、後期旧石器時代のナイフ形石器や石刃が、後世の遺構覆土等から出土しているため、調査区域周辺に石器集中区が存在している可能性がある⁹⁾。

縄文時代の遺跡は、北部の霞ヶ浦を望む鳥状に独立した台地周辺部や、かつて霞ヶ浦の入り江であった余部¹⁰⁾入から続く筑波・稲敷台地に形成された谷津地形の両岸で多く確認されている。特に貝塚は多く確認されてお

り、日本人の手による初の学術発掘調査がなされた国指定史跡の陸平貝塚や前期土器の標識遺跡である興津貝塚(25)は著名である¹⁰⁾。この他にも、早期～後期の当貝塚や信太入子ノ台遺跡(78)、前・中期の虚空蔵貝塚(15)、中期の木原台遺跡、後・晩期の信太貝塚(13)や平木貝塚(4)等があり、海生の貝類や魚類の遺存体が確認されている。また、特定の生業等の痕跡を示す遺跡が、低地の周辺部から確認されている。中でも谷津底から後期の粗製土器が大量に出土した陣屋敷低湿地遺跡や晩期の製塩遺跡である法堂遺跡はその代表である。

弥生時代の遺跡は、中期の常陸笹山遺跡¹¹⁾、多古山Ⅱ遺跡(80)、木原城址(43)や後期の陣屋敷遺跡、根本遺跡、野中遺跡(34)、信太入子ノ台遺跡、沢田古墳群等があげられる。陣屋敷遺跡と根本遺跡は、谷を一つ隔てただけの隣接した遺跡群であるが、土器の様相を異にしており注目されている¹²⁾。

古墳時代の遺跡は当貝塚周辺で多く確認されている。前期の遺跡は池端遺跡¹³⁾や木原城址である。中期以降は遺跡の数が増加する傾向が見られ、興津白井遺跡、講領砂山遺跡(28)、陣屋敷遺跡、根本遺跡、下リ遺跡¹⁴⁾、野中遺跡等が確認されている。野中遺跡の第7号竪穴建物跡からは、炉を囲むように3点の土製支脚が出土し、集落跡の規模からは中核的な性格を有していたと思われる¹⁵⁾。後期の遺跡は陸平貝塚、御堂平遺跡、天神平Ⅰ・Ⅱ遺跡等、広い平坦面を有する台地上に形成される傾向が指摘されている¹⁶⁾。古墳については、霞ヶ浦を望む台地上に築造された100mを超える中期の前方後円墳である愛宕山古墳を主墳とする木原白旗古墳群(46)、霞ヶ浦に面した砂丘上の微高地には、国学者色川三中の『常陸国風土記』逸文にみる「黒坂命」の論考でも知られる大塚古墳群(58)等の多くの古墳群が存在している。余郷入から続く谷津の周辺には、中期の円墳2基からなる沢田古墳群が築造されており、隣接する八牧原古墳群(26)内の庚申古墳¹⁷⁾では、後期の箱形石棺の中から人骨、金環、青銅環、ガラス小玉等が出土している。当貝塚から見つかった後期の方墳では、墳丘はすでに削平されていたが、墓道を伴う横穴式石室と箱式石棺の2つの埋葬施設を確認できた。

奈良・平安時代に入ると、村域は「信太郡」に、当貝塚周辺は「大野郷」に属したとされている¹⁸⁾。余郷入から続く谷津の周辺にある原畑遺跡(18)、稲荷山遺跡(20)では、平安時代の竪穴建物跡や掘立柱建物跡等が確認されている¹⁹⁾。信太入子ノ台遺跡では、「志太」「佛」の墨書土器、蓋に「大伴」の墨書が確認された須恵器の蔵骨器が出土している²⁰⁾。信太郡の郡衙として最も有力視されているのは、稲敷市下君山に存在する下君山廃寺である²¹⁾。平安時代末期の村域は、常陸平氏の勢力下で立荘された「信太荘」に属していたとされている。

鎌倉時代末期には、信太荘は後宇多上皇から東寺へ寄進されている。東寺の支配も南北朝の動乱によって終焉を迎えると、支配者是小田氏、山内上杉氏、土岐原氏とめまぐるしく変わった。佐竹氏が常陸統一を目前とした16世紀後半に、江戸崎城主の土岐(原)氏が信太荘一円を支配するようになったと考えられる。土岐氏は、北の固めとして木原城²²⁾を築き、信太荘の各地に土塁や空堀から構成される防衛施設を数多く設けている²³⁾。木原城址の外郭には、古墳を砦に改修した木原根火山遺跡(49)、御茶園遺跡、木原館跡(39)、木原門前遺跡(44)等の館や砦が所在し、木原城を防備している。また、三段に分かれて造成された大谷根古屋城(10)、舟子城、大谷城、根本台城等、霞ヶ浦北岸や大きな入り江からの侵入を強く意識した防衛拠点が幾つも築かれている²⁴⁾。この他にも、陣屋敷遺跡、城之内遺跡等、多くの城跡や館跡、砦跡が確認されている。天正18(1590)年、北条方に組みした土岐氏が、佐竹氏に江戸崎城を攻められて滅ぶと、その領土の信太や河内の地は芦名氏に与えられた。慶長7(1602)年、佐竹氏の秋田移封後は、複数の幕藩領主による複雑な支配変遷をとげている。

※ 文中の〈 〉内の番号は、表1及び第2図の該当遺跡番号と同じである。なお、本章は、財団調査報告第330集を基にし、若干加筆したものである。

表1 大谷貝塚周辺遺跡一覧表

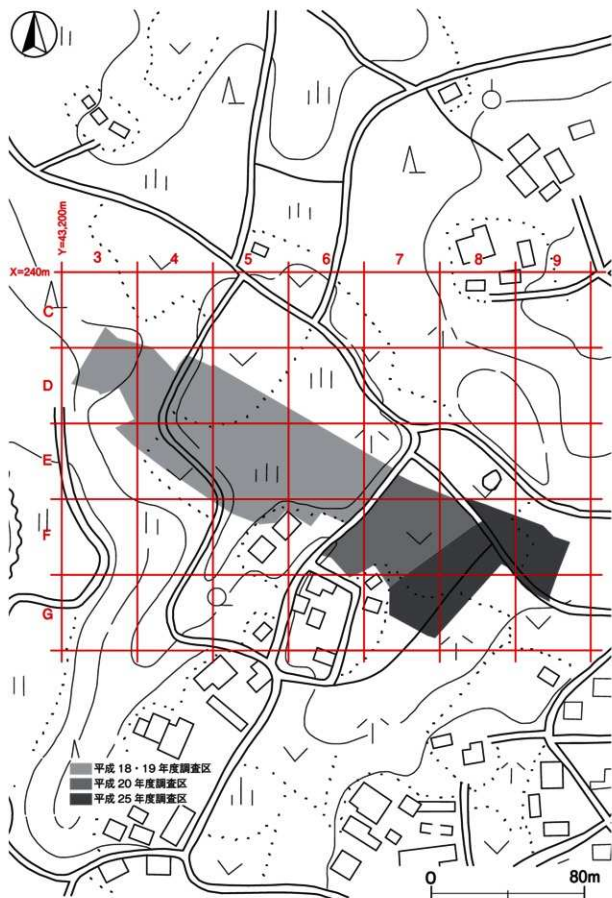
番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代							
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町			江戸	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町	江戸
①	大谷貝塚		○	○	○		○	○	41	荒地遺跡		○	○	○		○	
2	沢田古墳群		○	○	○			○	42	木原清月古墳群				○			
3	大谷谷津台遺跡			○	○	○			43	木原城址		○	○	○		○	
4	平木貝塚		○	○	○	○			44	木原門前遺跡							○
5	宮地遺跡		○	○		○			45	迎平遺跡			○				
6	余郷浜遺跡								46	木原白旗古墳群				○			
7	木曾ノ内遺跡			○			○		47	御茶園遺跡	○	○	○	○	○	○	○
8	信太宮平遺跡			○	○				48	御茶園西遺跡		○	○				○
9	巽久保遺跡		○						49	木原根火山遺跡				○			○
10	大谷根古屋城址						○		50	木原新宿遺跡		○	○				
11	大作台遺跡			○		○	○		51	木原石神塚							○
12	信大平台遺跡		○				○		52	木原二本松遺跡		○	○	○	○		
13	信太貝塚		○						53	大舟戸遺跡				○			
14	西山東添遺跡			○	○		○		54	池ノ湯庚申塚							○
15	虚空蔵貝塚	○	○		○				55	茂呂天神遺跡		○		○			
16	醒ヶ井遺跡		○						56	大須賀津古墳群				○			
17	高野台遺跡		○				○		57	茂呂後田遺跡		○			○		
18	原畑遺跡		○			○		○	58	大塚古墳群				○			
19	中根台遺跡			○					59	岸内遺跡	○	○	○	○	○	○	○
20	稲荷山遺跡		○		○	○			60	突之宮遺跡			○				
21	十三塚遺跡			○					61	宮地天神遺跡							
22	稲荷山北遺跡								62	茂呂堀立遺跡							
23	上ノ内遺跡								63	久保ノ内遺跡			○				
24	興津神明遺跡		○		○				64	茂呂根本台古墳群				○			
25	興津貝塚		○						65	息栖遺跡			○				
26	八枚原古墳群				○				66	経塚							
27	刈満田遺跡			○	○				67	大塚杉山遺跡		○					
28	請領妙山遺跡			○	○				68	大塚平山遺跡		○					
29	八ヶ山遺跡			○	○				69	高峯遺跡							
30	摩迦陀東遺跡								70	山内入堀遺跡							○
31	摩迦陀遺跡		○		○	○			71	太田門遺跡							
32	摩迦陀北遺跡		○						72	稲子田塚							
33	柿平遺跡				○				73	根火前遺跡		○					
34	野中遺跡		○	○	○				74	開野平台遺跡							
35	天王後遺跡								75	城ノ内遺跡		○					○
36	原南遺跡		○						76	小松川貝塚		○					
37	原遺跡	○	○		○				77	長塚遺跡		○					
38	清月遺跡								78	信太入子ノ台遺跡	○	○	○	○			
39	木原館群				○		○		79	信太美胸古墳群				○			
40	木原原古墳群				○				80	多古山Ⅱ遺跡		○	○	○			

註

- 1) a 大森昌南他「茨城の地質をめぐって」『日曜の地学』8 築地書館 1979年9月
b 美浦村史編さん委員会「美浦村誌-美浦村誕生40周年記念-」美浦村 1995年11月
- 2) 茨城県教育庁文化課「茨城県遺跡地図(地名表編・地図編)」茨城県教育委員会 2001年3月
- 3) 註1bに同じ。
- 4) 中村哲也 川村勝 黒沢浩 石川日出志 熊野正也「陣屋敷遺跡」『陸平研究所報告』1 美浦村・陸平調査会 1992年12月
- 5) 中村哲也 川村勝 小玉秀成 牛山英昭 黒沢浩「根本遺跡」『陸平研究所報告』2 美浦村・陸平調査会 1996年3月
- 6) 註1bに同じ。
- 7) 高橋嘉朗 小沢登 大竹房雄 吉田茂 武田藤一「御茶園遺跡」美浦村教育委員会 1994年3月
- 8) 川村勝「興津白井遺跡 美浦村水処理センター建設に伴う埋蔵文化財の調査」『美浦村教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告』9 美浦村教育委員会・美浦村興津白井遺跡調査会 2000年3月
- 9) 駒澤悦郎 成島一也 作山智彦「大谷貝塚 国道125号大谷バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書2」『茨城県教育財団文化財調査報告』第317集 2009年3月
- 10) a 中村哲也 橘泉浩二 阿部芳郎「陸平貝塚 一調査報告書1・1997年度発掘調査研究報告書-」『陸平研究所叢書』1 美浦村教育委員会 2004年3月
b 田村雅樹「本原城址 主要地方道美浦栄線交差点改良事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第376集 2013年3月
- 11) 大竹房雄 荒堀彰夫 外山泰久「常陸笠山」美浦村教育委員会 1986年3月
- 12) 註4・5に同じ。
- 13) 中村哲也 川村勝「池端遺跡-発掘調査報告書-」『陸平研究所叢書』2 美浦村教育委員会 2004年3月
- 14) 高木國男 小泉美明 伊藤秀「下り内遺跡」美浦村教育委員会 1986年12月
- 15) 中村哲也「野中遺跡 第2次発掘調査報告書」『美浦村教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告』8 美浦村教育委員会 2000年3月
- 16) 註13に同じ。
- 17) 大竹房雄 高橋嘉朗「庚申古墳(緊急発掘調査報告書) 庚申古墳発掘調査会・美浦村教育委員会 1989年3月
- 18) 註1cに同じ。
- 19) 奥富雅之 川村勝「興津地区遺跡群 高野台遺跡 原畑遺跡 稲荷山遺跡 日本中央競馬会の森林調教施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」『美浦村教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告』7 美浦村教育委員会 1996年3月
- 20) 中村哲也 宇佐美義春 関健吾 丸山和浩 坂田裕之「信太入子ノ台遺跡」美浦村教育委員会 2011年12月
- 21) a 註1bに同じ。
b 堀部猛「古代のみち -常陸を通る東海道駅路-」『上高津貝塚ふるさと歴史の広場 第12回特別展』上高津貝塚ふるさと歴史の広場 2013年4月
c 瓦吹堅 佐藤正好 黒沢彰成「茨城県における古代瓦の研究」『学術調査報告書』4 茨城県立歴史館 1994年3月
- 22) a 後藤和民他「本原城址Ⅰ -平成5年度 予備発掘調査概報」本原城址調査団 1994年3月
b 後藤和民他「本原城址Ⅱ -平成6年度 予備発掘調査概報」本原城址調査団 1995年3月
- 23) a 註1cに同じ。
b 阿見町史編さん委員会編「阿見町史」阿見町 1983年3月
- 24) 註1bに同じ。

参考文献

- ・ 本橋弘巳「沢田古墳群 国道125号大谷バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1」『茨城県教育財団文化財調査報告』第276集 2007年3月
- ・ 櫻井完介「大谷貝塚2 国道125号大谷バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書3」『茨城県教育財団文化財調査報告』第330集 2010年3月



第2図 大谷貝塚調査区設定図（美浦村都市計画図 25,000 分の 1 より作成）

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

大谷貝塚は、茨城県の南部、霞ヶ浦南岸の稲敷郡美浦村大谷965-2番地ほかに所在し、高橋川左岸の標高20～25mの台地縁辺部に立地している。調査面積は3,000㎡で、調査前の現況は畑地及び山林である。

今回の調査は、平成18～20年度に調査を実施した地点の東部について行った。当貝塚は、平成18～20年度の調査で旧石器時代から近世までの複合遺跡であることが判明している。今回の調査で、縄文時代の陥穴3基、土坑9基、弥生時代の竪穴建物跡4棟、土坑2基、古墳時代の竪穴建物跡2棟、溝跡2条、室町時代の地下式坑1基、溝跡1条、土坑1基、時期不明の竪穴建物跡2棟、竪穴遺構1基、溝跡21条、道路跡4条、土坑95基、ピット群5か所を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に16箱出土している。主な出土遺物は、縄文土器(深鉢)、弥生土器(壺)、土師器(坏・高台付坏・高坏・甕・甌)、須恵器(高坏・瓶類)、土師質土器(小皿・鍋)、陶器(碗・皿)、磁器(小坏)、土製品(土玉・管状土錘・土器片錘・紡錘車)、石器(鎌・磨製石斧・敲石・凹石・砥石)、石製品(勾玉未成品・有孔木板未成品)、鉄製品(小刀)である。

第2節 基本層序

調査区のF9h1区にテストピットを設定し、基本土層(第3図)の堆積状況の観察を行った。テストピットの観察結果は、以下のとおりである。

第1層は、暗褐色を呈する耕作土・表土層である。ローム粒子や炭化粒子を少量含み、粘性は弱く、層厚は30cmである。

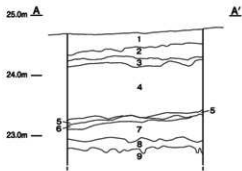
第2層は、褐色を呈するハードローム層である。層厚は10～22cmである。

第3層は、褐色を呈する常総粘土層への漸移層である。粘土ブロックを少量含み、層厚は8～16cmである。

第4層は、灰白色を呈する常総粘土層である。鉄分を少量含み、粘性は強く、層厚は80～88cmである。

第5層は、灰白色を呈する常総粘土層である。鉄分を中量含み、粘性は強く、層厚は8～10cmである。

第6層は、灰白色を呈する常総粘土層である。黒色土を多量、鉄分や砂粒を少量含み、粘性・締まりは強く、層厚は6～10cmである。



第3図 基本土層図

第7層は、淡黄色を呈する常総粘土層である。黒色土を中量、鉄分や砂粒を少量含み、粘性・締まりは強く、層厚は18～42cmである。

第8層は、淡黄色を呈する竜ヶ崎砂礫層への漸移層である。砂粒を多量、鉄分を微量含み、粘性は弱く、締まりは強く、層厚は10～26cmである。

第9層は、灰褐色を呈する竜ヶ崎砂礫層である。粘性は弱く、締まりは強く、層厚は下層が未掘のため不明である。

遺構は、第2層上面で確認している。

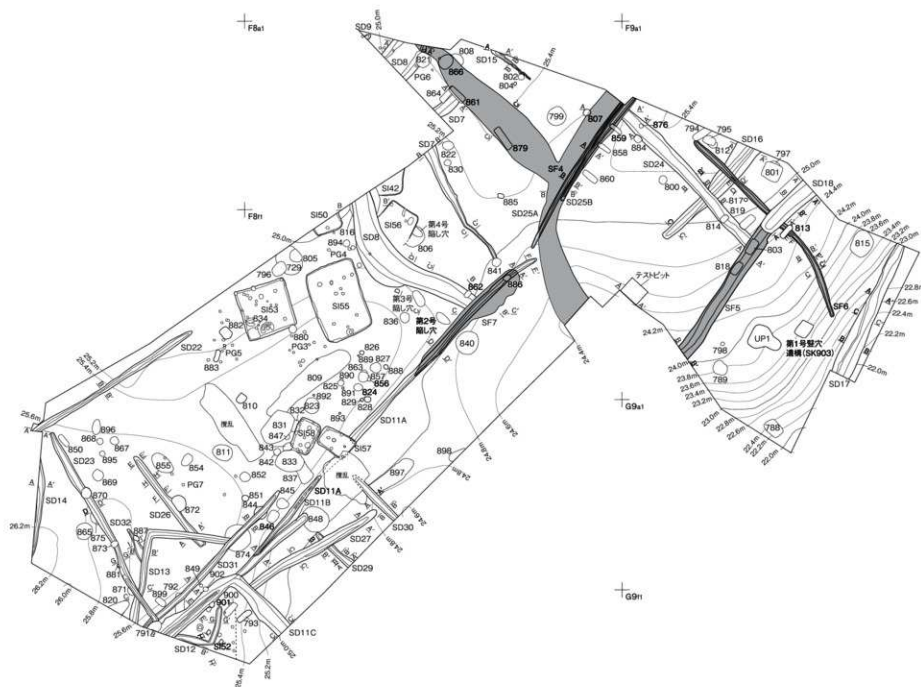


X=+120m
Y=+43.500m
F7a1

F8a1

F9a1

X=+120m
Y=+43.500m
F10a1



G7h

G9h

X=+60m
Y=+43.000m
G10h

道路跡硬化面



第4図 大谷具塚遺構配置図

第3節 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、陥し穴3基、土坑9基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 陥し穴

第2号陥し穴（第5図）

位置 調査区のF8h6区、標高25mほどの台地緩斜面部に位置している。

規模と形状 長径1.86m、短径0.88mの楕円形で、長径方向はN-39°-Wである。深さは75cmで、底面はほぼ平坦である。壁は外傾している。

覆土 2層に分層できる。レンズ状の堆積状況から、自然堆積である。

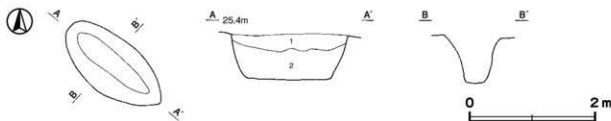
土層解説

1 黒褐色 ローム粒子中量

2 暗褐色 ローム粒子多量

遺物出土状況 縄文土器片3点（深鉢）が出土している。土器は細片のため、図示できなかったが、1点は胎土や文様から中期後半と考えられる。

所見 立地や形状から陥し穴と考えられる。時期は、出土土器から中期後半と考えられる。

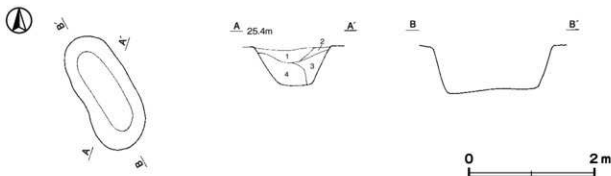


第5図 第2号陥し穴実測図

第3号陥し穴（第6図）

位置 調査区のF8h5区、標高25mほどの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 長径1.92m、短径0.90mの楕円形である。長径方向はN-28°-Wと推定できる。深さは68cmで、底面は平坦である。壁は外傾している。



第6図 第3号陥し穴実測図

覆土 4層に分層できる。堆積状況から埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子微量 | 3 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 褐色 | ローム粒子多量 | 4 褐色 | ロームブロック中量 |

遺物出土状況 縄文土器片2点(深鉢)、礫2点が出土している。土器は細片のため、図示できなかった。

所見 立地や形状から陥し穴と考えられる。時期は、第2号陥し穴と近接していることから、同時期と考えられる。

第4号陥し穴(第7図)

位置 調査区のF85区、標高25mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第806号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長径1.72m、短径0.85mの楕円形で、長径方向はN-62°-Wである。深さは57cmで、底面は中央から東方向にテラス状の段をなしている。壁は外傾している。

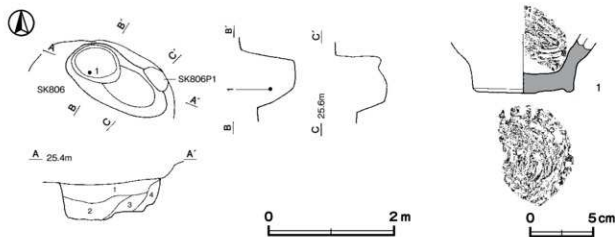
覆土 4層に分層できる。レンズ状の堆積状況から、自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量 | 3 暗褐色 | ローム粒子多量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量 | 4 褐色 | ロームブロック中量 |

遺物出土状況 縄文土器片10点(深鉢)が出土している。

所見 時期は、出土土器から早期後葉と考えられ、形状から陥し穴と考えられる。



第7図 第4号陥し穴・出土遺物実測図

第4号陥し穴出土遺物観察表(第7図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	-	(4.7)	(7.5)	長石・石英・雲母・磁鉄	橙	普通	内面に条痕文	底部飾様に指頭押印文	覆土中層	10%

表2 縄文時代陥し穴一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
2	F846	N-30°-W	楕円形	1.86 × 0.88	75	外傾	平坦	自然	縄文土器	
3	F845	N-28°-W	楕円形	1.92 × 0.90	68	外傾	平坦	人為	縄文土器、礫	
4	F85	N-62°-W	楕円形	1.72 × 0.85	57	外傾	有段	自然	縄文土器	本跡→SK806

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP 2	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	口唇部に刷目 条痕文	覆土中	PL 7
TP 3	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子・繊維	にぶい橙	口唇部及び隆帯に刷目	覆土中	
TP 4	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	外面隆帯 条痕文	覆土中	

第 802 号土坑 (第 9 図)

位置 調査区の F 8 b8 区、標高 25 m ほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径 0.60 m、短径 0.53 m の楕円形で、長径方向は N - 30° - E である。深さは 24cm で、底面は皿状である。壁は外傾している。

覆土 2 層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

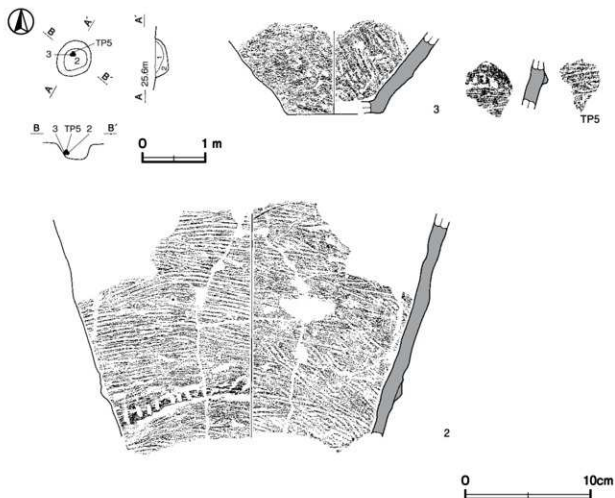
土層解説

1 暗褐色 ローム粒子中量

2 暗褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 縄文土器片 9 点 (深鉢) が出土している。遺物は第 2 層上面から出土している。

所見 時期は、出土遺物から早期後葉に比定できる。性格は不明である。



第 9 図 第 802 号土坑・出土遺物実測図

第 802 号土坑出土遺物観察表 (第 9 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
2	縄文土器	深鉢	—	(17.7)	—	長石・石英・ 雲母・緑泥	黒褐	普通	外・内面に染灰文 隆帯に刻み目	覆土中層	25% PL 7
3	縄文土器	深鉢	—	(6.5)	(7.5)	長石・石英・雲母・ 赤色粒子・緑泥	明赤褐	普通	外・内面に染灰文	覆土中層	10%

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP 5	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・ 緑泥	黒褐	外・内面に染灰文	覆土中層	

第 806 号土坑 (第 10 図)

位置 調査区の F 8 5 区、標高 25 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 4 号陥し穴を掘り込んでおり、第 56 号竪穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 確認できた長径は 2.45 m、短径は 2.12 m の楕円形で、長径方向は N - 63° - W である。深さは 28 cm で、底面は平坦である。壁は直立している。

ピット 3 か所。P 1 ~ P 3 は径 29 ~ 44 cm、深さ 32 ~ 51 cm で、性格は不明である。

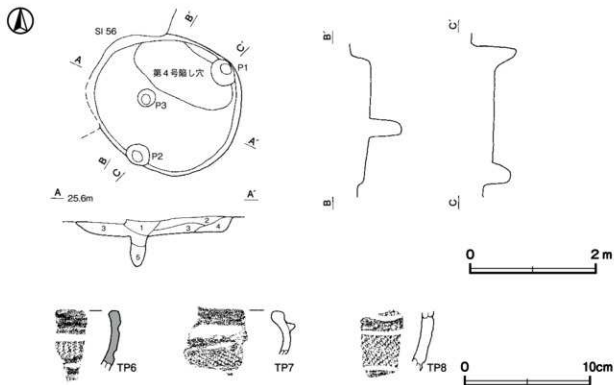
覆土 5 層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | 焼土粒子少量、ローム粒子微量 | 4 褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量 | 5 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量 | | |

遺物出土状況 縄文土器片 46 点 (深鉢)、剥片 1 点のほか、土師器片 1 点 (甕) が出土している。

所見 時期は、形状や出土土器から中期後半に比定できる。性格は不明である。



第 10 図 第 806 号土坑・出土遺物実測図

第 806 号土坑出土遺物観察表(第 10 図)

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP 6	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・磁鉄	褐	沈澱による区画 区画内に燃赤文を施文	覆土中	
TP 7	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	明赤褐	除帯→沈澱→燃赤文を施文	覆土中	PL 7
TP 8	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	黒褐	沈澱による区画 区画内に単節縄文LR	覆土中	

第 808 号土坑 (第 11 図)

位置 調査区の F 8 b6 区, 標高 25 m ほどの台地緩斜面部に位置している。

重複関係 第 4 号道路, 第 866 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 確認できた長径は 1.50 m, 短径は 1.35 m の楕円形で, 長径方向は N-72°-E である。深さは 28cm で, 底面は平坦である。壁は外傾している。

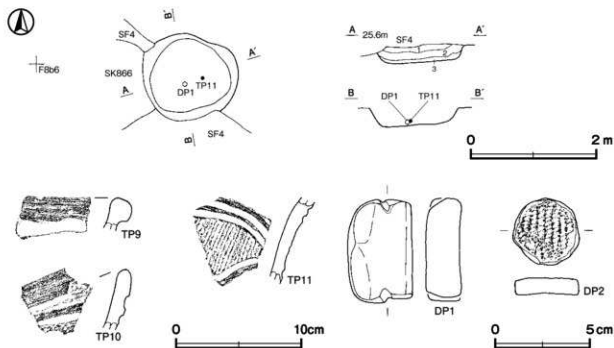
覆土 3 層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから, 埋め戻されている。

土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子少量
- 2 黒 褐 色 ロームブロック少量
- 3 暗 褐 色 ロームブロック少量

遺物出土状況 縄文土器片 33 点 (深鉢), 土製品 2 点 (土器片鍾, 土器片円盤) が出土している。

所見 時期は, 出土土器から中期後半に比定できる。性格は不明である。



第 11 図 第 808 号土坑・出土遺物実測図

第 808 号土坑出土遺物観察表(第 11 図)

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP 9	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	口唇部肥厚 直下に沈澱	覆土中	
TP10	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	赤褐	2本の横位太沈澱	覆土中	
TP11	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	暗褐	沈澱による区画 区画内に燃赤文を施文後, 磨り消し	覆土中層	PL 8

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 1	土器片群	1.4	3.4	1.9	42.02	長石・石英・ 灰身	にぶい褐色	脚縁部研ぎ調整 両端部に切り込み	覆土下層	PL10
DP 2	土器片 同型	3.5	3.4	0.9	11.06	長石・石英・ 灰身	明褐色	脚縁研ぎ調整	覆土中	PL10

第 811 号土坑 (第 12 図)

位置 調査区の G 7 b0 区、標高 25 m ほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径 2.01 m、短径 1.70 m の楕円形で、長径方向は N - 64° - W である。深さは 99 cm で、底面は皿状である。壁は外傾している。

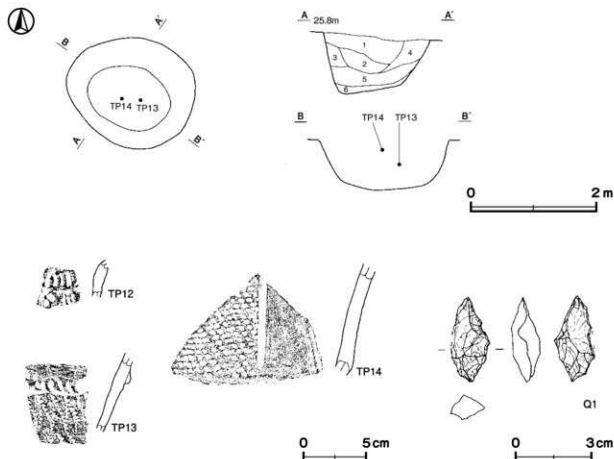
覆土 6 層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子中量	4 暗褐色	ロームブロック少量
2 暗褐色	ローム粒子少量	5 褐色	ロームブロック中量、焼土粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック中量	6 褐色	ロームブロック中量

遺物出土状況 縄文土器片 37 点 (深鉢)、剥片 1 点が出土している。

所見 時期は、出土土器から中期後半に比定できる。性格は不明である。



第 12 図 第 811 号土坑・出土遺物実測図

第 811 号土坑出土遺物観察表 (第 12 図)

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP12	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐色	変形爪形文	覆土中	PL. 7

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP13	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	変形爪形文 貝殻連続波状文	覆土中層	PL.8
TP14	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	明褐色	横位回転の単節縄文RLを施文 沈澱を垂下 すり消し	覆土上層	PL.9

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	剥片	3.4	(1.6)	1.2	(4.2)	チャート	一側縁に片面からの急角度の加工を施す	覆土中	

第840号土坑（第13図）

位置 調査区のF86区、標高25mほどの台地緩斜面部に位置している。

規模と形状 長径2.50m、短径2.40mの円形である。深さは25cmで、底面は平坦である。壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 3層に分層できる。ロームブロックや焼土粒子が含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

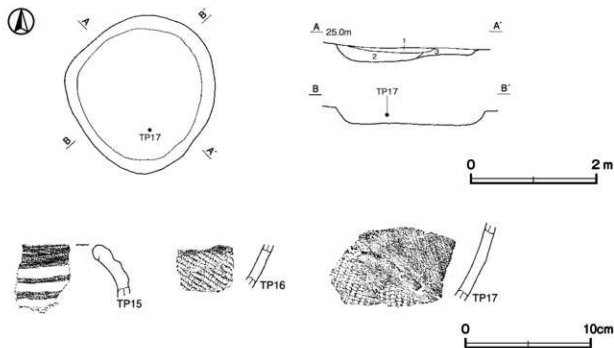
1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量

3 暗褐色 ロームブロック中量

2 暗褐色 ローム粒子多量

遺物出土状況 縄文土器片32点（深鉢）、剥片1点が出土している。

所見 時期は、出土土器から中期後半に比定できる。性格は不明である。



第13図 第840号土坑・出土遺物実測図

第840号土坑出土遺物観察表（第13図）

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP15	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	灰黄褐色	横位の沈澱を巡らす	覆土中	PL.7
TP16	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	灰褐色	横位回転の単節縄文RLを施文	覆土中	
TP17	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	斜位回転の単節縄文LRを施文	覆土中層	

第 844 号土坑 (第 14 図)

位置 調査区の G 8c1 区, 標高 25 m ほどの台地緩斜部に位置している。

重複関係 第 31 号溝に掘り込まれている。

規模と形状 確認できた長径は 1.39 m, 短径は 1.10 m の楕円形で, 長径方向は N - 40° - W である。深さは 93cm で, 底面は平坦である。壁は外傾している。

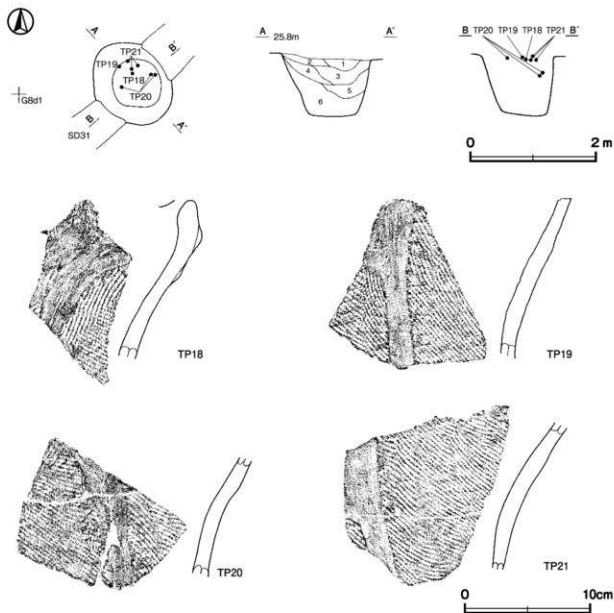
覆土 6 層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから, 埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|------------------|-----------------|
| 1 黒 褐色 ロームブロック多量 | 4 暗 褐色 ローム粒子多量 |
| 2 暗 褐色 ロームブロック中量 | 5 褐 色 ロームブロック中量 |
| 3 暗 褐色 ロームブロック少量 | 6 褐 色 ロームブロック多量 |

遺物出土状況 縄文土器片 13 点 (深鉢) が出土している。

所見 時期は, 出土土器から中期後半に比定できる。性格は不明である。



第 14 図 第 844 号土坑・出土遺物実測図

第 844 号土坑出土遺物観察表 (第 14 図)

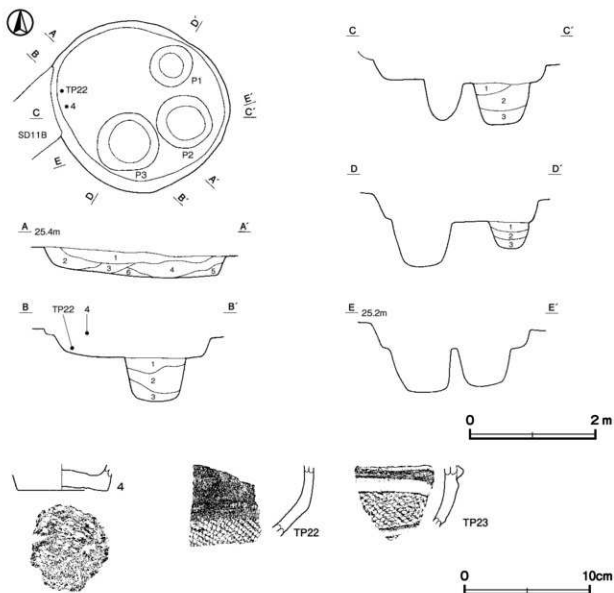
番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP18	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	波状口縁 隆帯による区画 単節縄文 RL を横位で施文	覆土上層	PL 9
TP19	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	微隆線文で区画 区画内に単節縄文 RL	覆土上層	PL 9
TP20	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	微隆線文で区画 区画内に単節縄文 RL	覆土中層	
TP21	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	微隆線文で区画 区画内に単節縄文 RL	覆土上層	

第 848 号土坑 (第 15 図)

位置 調査区の G 8 d2 区。標高 25 m ほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第 11B 号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長径 2.83 m, 短径 2.70 m の楕円形で、長径方向は N - 48° - W である。深さは 40cm で、底面は平坦である。壁は外傾している。



第 15 図 第 848 号土坑・出土遺物実測図

ビット 3か所。P1～P3は径60～100cm、深さ47～73cmで、性格は不明である。

ビット土層解説

- | | |
|-----------------|--------------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック少量 | 3 暗褐色 ロームブロック多量、粘土ブロック中量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック中量 | |

覆土 6層に分層できる。ロームブロックや粘土ブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|------------------------|--------------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量 | 4 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量 | 5 暗褐色 ロームブロック中量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック少量 | 6 暗褐色 ロームブロック中量、粘土ブロック少量 |

遺物出土状況 縄文土器片63点(深鉢)が出土している。

所見 時期は、形状と出土土器から中期後半に比定できるが、性格は不明である。

第848号土坑出土遺物観察表(第15図)

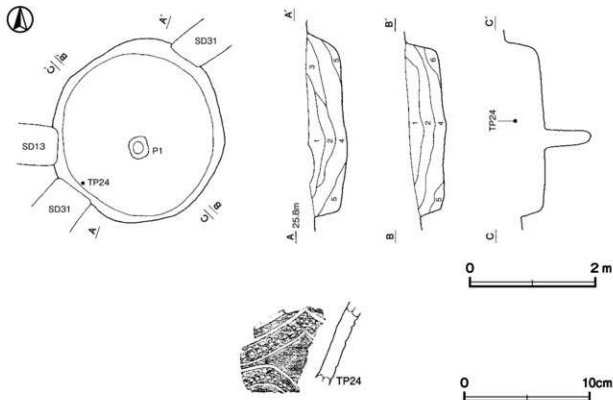
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
4	縄文土器	深鉢	—	〔20〕	〔72〕	長石・石英	にぶい褐	普通	平底	覆土上層	5%

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP22	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	横位回転の単節縄文RLを施文	覆土下層	PL.8
TP23	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	褐	隆帯・沈線間を単節縄文RLで充填	覆土中	PL.8

第874号土坑(第16図)

位置 調査区のG7d0区、標高25mほどの台地緩斜面部に位置している。

重複関係 第13・31号溝に掘り込まれている。



第16図 第874号土坑・出土遺物実測図

規模と形状 長径は290 m、短径は273 mの円形である。深さは55cmで、底面はほぼ平坦である。壁は外傾している。

ピット 径36～38cm、深さ69cmの円形でほぼ中央に位置している。性格は不明である。

覆土 6層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

1 黒 褐 色	ローム粒子少量	4 暗 褐 色	ロームブロック中量
2 暗 褐 色	ローム粒子中量	5 暗 褐 色	ローム粒子少量
3 暗 褐 色	ロームブロック少量	6 暗 褐 色	ロームブロック微量

遺物出土状況 縄文土器片56点（深鉢）が出土している。

所見 時期は、形状や出土土器から中期後半に比定できるが、性格は不明である。

第874号土坑出土遺物観察表（第16図）

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴はか	出土位置	備考
TP24	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	にふい堀	沈澱による山形及び流状の区画 区画内：列突文光斑	覆土中層	PL 8

表3 縄文時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
729	F 8g2	N-38°-W	不整楕円形	3.02 × 2.50	58	外傾	平坦	人為	縄文土器 粘土塊	本跡→SK796・805
802	F 8b8	N-30°-E	楕円形	0.60 × 0.53	24	外傾	皿状	人為	縄文土器	
806	F 8b5	N-63°-W	[楕円形]	(2.45) × 2.12	28	直立	平坦	人為	縄文土器 銅片	第4号箱し穴 →本跡→SE6
808	F 8b6	N-72°-E	[楕円形]	1.50 × (1.35)	28	外傾	平坦	人為	縄文土器 土製品	本跡→SK866, SF 4
811	G 7b0	N-64°-W	楕円形	2.01 × 1.70	99	外傾	皿状	人為	縄文土器 銅片	
840	F 8i6	-	円形	2.50 × 2.40	25	緩斜	平坦	人為	縄文土器 銅片	
844	G 8c1	N-40°-W	[楕円形]	1.39 × (1.10)	93	外傾	平坦	人為	縄文土器	本跡→SD31
848	G 8d2	N-48°-W	楕円形	2.83 × 2.70	40	外傾	平坦	人為	縄文土器	本跡→SD11B
874	G 7d0	-	円形	2.90 × 2.73	55	外傾	平坦	人為	縄文土器	本跡→SD13・35

2 弥生時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴建物跡4棟、土坑2基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 竪穴建物跡

第42号竪穴建物跡（第17図）

調査年度 北半部を平成20年度、南半部を平成25年度に調査した。

位置 調査区のF 8e4区、標高25 mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第8号溝、第605・816号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南北軸は5.58 mで、東西軸は3.77 mしか確認できなかったが、隅丸長方形と推定でき、南北軸方向はN-3°-Eである。壁は高さ4～14cmで、外傾している。

床 平坦で、硬化面は認められない。

覆土 2層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

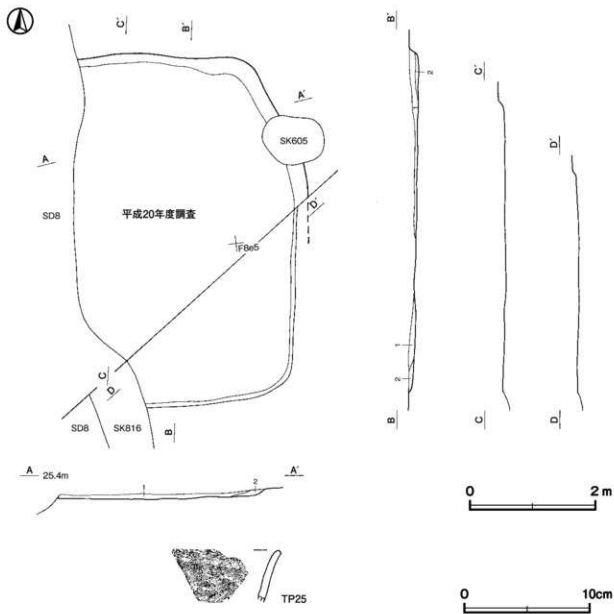
土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量

2 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 弥生土器片4点(壺)のほか、縄文土器片29点(深鉢)が出土している。

所見 時期は、出土土器の様相から後期と推測できる。縄文土器は、埋め戻しの過程で混入したものとみられる。



第17図 第42号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第42号竪穴建物跡出土遺物観察表(第17図)

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP25	弥生土器	壺	長石・石英・雲母・針状鉱物	橙	口唇部に刺突 密な熱赤文	覆土中	

第50号竪穴建物跡(第18図)

調査年度 北半部を平成20年度、南半部を平成25年度に調査した。

位置 調査区のF8E3区、標高25mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第49号堅穴建物跡を掘り込み、第4号ピット群に掘り込まれている。第675号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 長軸3.25 m、短軸3.10 mの隅丸方形で、主軸方向はN-20°-Wである。壁は高さ5～25cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、部分的な貼床である。壁溝が東壁下に確認できた。

ピット 2か所。P1・P2は径24～36cm、深さ14～22cmの楕円形で、主柱穴と考えられる。

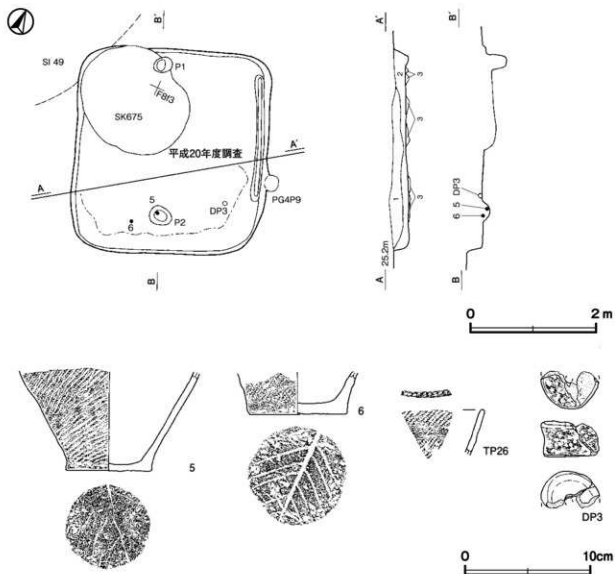
覆土 2層に分層できる。第3層は貼床の構築土である。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 褐灰色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量 3 濃い黄褐色 ロームブロック多量
2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 弥生土器片3点(壺)、土製品2点(紡錘車、不明)のほか、縄文土器片40点(深鉢)、土器器片2点(坏、甕)が出土している。

所見 時期は、出土土器の様相から後期後半と推測できる。



第18図 第50号堅穴建物跡・出土遺物実測図

第 50 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 18 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
5	赤生土器	壺	-	(7.9)	6.8	長石・石英・ 炭屑・輝	黒褐色	普通	底面に本葉痕 付加糸一種 (附加之葉) 縄文を 施文	F2 覆土下層	20%
6	赤生土器	壺	-	(3.4)	7.7	長石・石英	黒い赤褐色	普通	底面に本葉痕 横位回転の単純縄文 L 形を施文	覆土下層	10%

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP26	赤生土器	壺	長石・石英・雲母・ 針状炭化物	黒い橙	口唇部に縄文原形で押捺 横位回転の単純縄文 L 形を施文	覆土中	PL.7

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP.3	紡錘車	(4.6)	-	2.7	(32.9)	長石・石英・ 赤色粒子	明赤褐色	外面に棒状工具による刺突	床面	PL.10

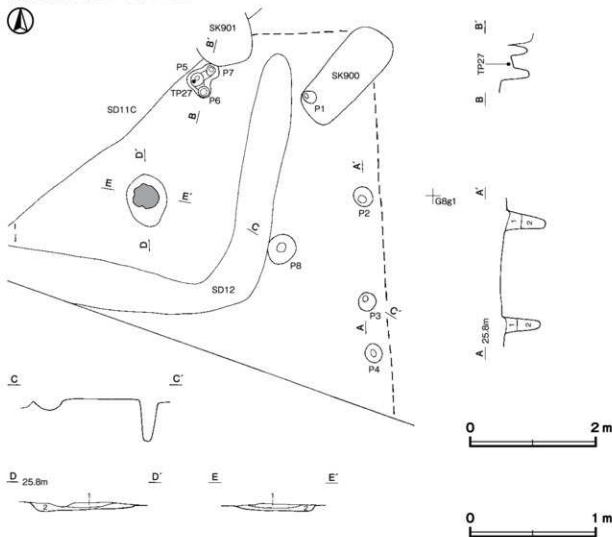
第 52 号竪穴建物跡 (第 19・20 図)

位置 調査区の G7f0 区、標高 25 m ほどの台地平坦部に位置している。

確認状況 壁及び床は削平を受けており、炉及びピットを確認した。

重複関係 第 11C・12 号溝跡、第 900・901 号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 形状は不明である。



第 19 図 第 52 号竪穴建物跡実測図

炉 長径 0.82 m、短径 0.62 m の楕円形で、長径方向は N-6°-W である。炉床底面は皿状で、10cm 掘り込まれ、緩やかに立ち上がっている。炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。第 1 層上面が炉床面である。

炉土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量 2 褐色 ロームブロック中量

ピット 8 か所。径 17～37cm、深さ 20～46cm の円形あるいは楕円形で、性格は不明である。

P 2・3 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量 2 褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 P 5 の覆土中層から弥生土器片 1 点（壺）が出土している。本跡に伴う遺物と考えられる。

所見 出土土器と本跡の北東方向約 30m に後期後半の第 50・55 号竪穴建物跡が位置していることから、同時期と考えられる。



第 20 図 第 52 号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 52 号竪穴建物跡出土遺物観察表（第 20 図）

番号	種別	器種	粘土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP27	弥生土器	壺	長石・石英・雲母	黒黒	附加糸一種（附加 2 条）縄文を施文	P 5 覆土中層	

第 55 号竪穴建物跡（第 21～23 図）

位置 調査区の F 8h3 区、標高 25 m ほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸 7.91 m、短軸 5.42 m の隅丸長方形で、主軸方向は N-19°-W である。壁は高さ 5～28cm で、外傾している。

床 平坦で、出入口から中央部にかけて、踏み固められている。壁溝が、西壁下から南西コーナー部にかけて確認できた。

炉 3 か所。北壁寄りに付設されている。炉 1 は長径 48cm、短径 36cm の楕円形で、深さ 5cm、炉 2 は長径 34cm、短径 22cm の楕円形で、深さ 4cm、炉 3 は長径 28cm、短径 24cm の楕円形で、深さ 4cm の地床炉である。各炉ともに皿状に掘りくぼめられ、炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。炉 1～炉 3 の新旧関係は不明である。炉 1 の第 1・2 層に焼土ブロックが含まれていることから、建物廃絶時まで使用されていたとみられる。

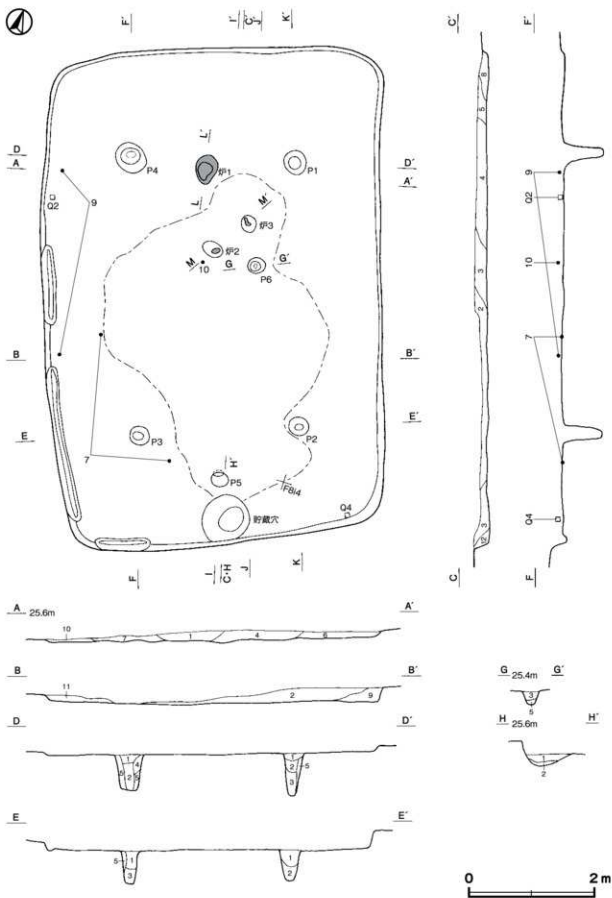
炉 1 土層解説

- 1 暗褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック少量
2 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子微量
3 暗赤褐色 焼土粒子多量、ローム粒子少量
4 黒褐色 ローム粒子多量

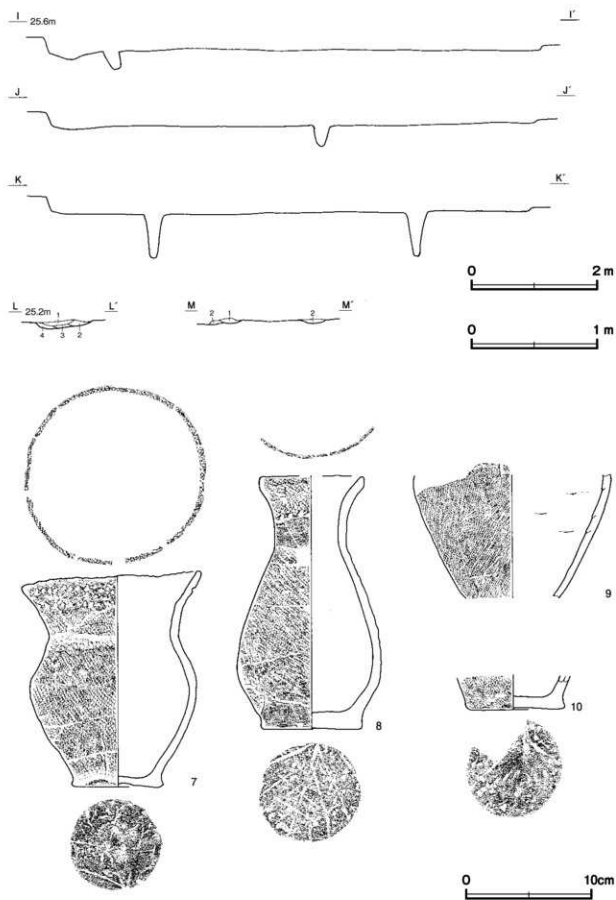
炉 2・3 土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子多量
2 黒褐色 ロームブロック多量

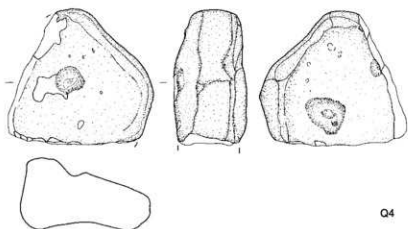
ピット 6 か所。P 1～P 4 は径 27～50cm、深さ 67～70cm で、規模と形状から主柱穴と考えられる。P 5 は径 25cm ほど、深さ 33cm で、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 6 は径 26cm、深さ 34cm で、性格は不明である。



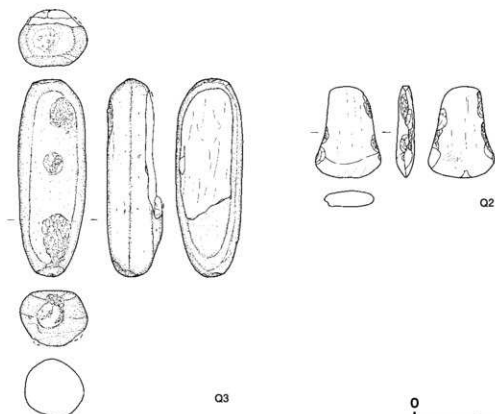
第 21 图 第 55 号竖穴建物跡实测图



第22图 第55号竖穴建物跡・出土遺物実測図



Q4



Q3

0 10cm

第23図 第55号竪穴建物跡出土遺物実測図

ビット土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
2 暗褐色 ロームブロック少量
3 暗褐色 ローム粒子中量

- 4 褐色 ローム粒子中量
5 褐色 ローム粒子多量

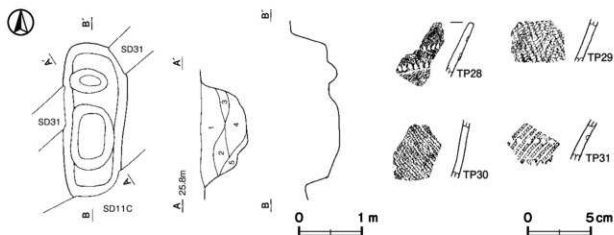
貯蔵穴 南壁際に位置し、径80cmほどの楕円形で、深さ16cmである。底面は皿状で、壁は緩やかに立ち上がっている。配置や形状から貯蔵穴と考えられる。

貯蔵穴土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量

- 2 暗褐色 ロームブロック中量

覆土 12層に分層できる。ロームブロックが含まれることから、埋め戻されている。



第24図 第792号土坑・出土遺物実測図

第792号土坑出土遺物観察表（第24図）

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP28	弥生土器	壺	長石・石英・雲母	にじみ橙	口唇部に斜み目 2列の刺突文 付加糸一種（附加2条）縄文	覆土下層	
TP29	弥生土器	壺	長石・石英・雲母	黒褐	付加糸一種（附加2条）縄文を羽状構成	覆土上層	
TP30	弥生土器	壺	長石・石英・雲母	橙	付加糸一種（附加2条）縄文	覆土中	
TP31	弥生土器	壺	長石・石英・雲母	橙	付加糸二種（附加1条）縄文を筋文後 2列の刺突文	覆土中	PL. 7

第834号土坑（第25図）

位置 調査区のF8h1区、標高25mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第53号堅穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 長径0.20m、短径0.18mの円形である。深さは28cmで、底面は皿状である。壁は直立している。

覆土 2層に分層できる。ローム粒子や焼土粒子が含まれていることから、埋め戻されている。

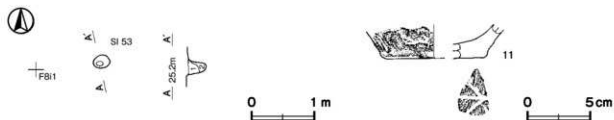
土層解説

1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量

2 黒褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 弥生土器片2点（壺）が出土している。

所見 時期は、出土土器と第53号堅穴建物跡との重複関係から弥生時代と考えられる。



第25図 第834号土坑・出土遺物実測図

第834号土坑出土遺物観察表（第25図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
11	弥生土器	壺	-	(27)	(7.6)	長石・石英	明赤褐	普通	底面に本業痕 付加糸一種（附加2条）縄文	覆土中	5%

表5 弥生時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
792	G 7 9	N - 2° - E	隅丸長方形	2.42 × 1.03	63	皿状	外傾	人為	弥生土器	本跡→SD41C・31
834	F 8h1	-	円形	0.20 × 0.18	28	皿状	直立	人為	弥生土器	本跡→SI53

3 古墳時代の遺構と遺物

当該時代の遺構は、竪穴建物跡2棟、溝跡2条を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 竪穴建物跡

第53号竪穴建物跡（第26～29図）

位置 調査区のF 8h1区、標高25mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第834号土坑を掘り込み、第880号土坑第3号ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.42m、短軸5.38mの方形で、主軸方向はN-72°-Eである。壁は高さ5～44cmで、直立している。

床 平坦な貼床で、出入口から竈の焚口部にかけての中央部が踏み固められている。貼床は、床面全体を5～20cm掘り下げた部分にローム土を多量に埋土して構築されている。壁下には壁溝が巡っている。南壁の中央部西寄りに馬蹄形の高まりがある。

竈 西壁際の南寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで90cmで、燃焼部幅は32cmである。基部は、床面の高さから8～16cm掘りくぼめた部分にローム粒子を多く含む第8・9層を埋土して構築されている。袖部は、ロームブロックや砂質粘土ブロック、焼土粒子を含む暗褐色土の第5・6層で構築されている。火床部は床面から16cm掘りくぼめた部分で、第7層を埋土して構築されている。火床面は、燃焼部の中央部から焚口部寄りに位置し、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁を掘り込んでいない。

遺土層解説

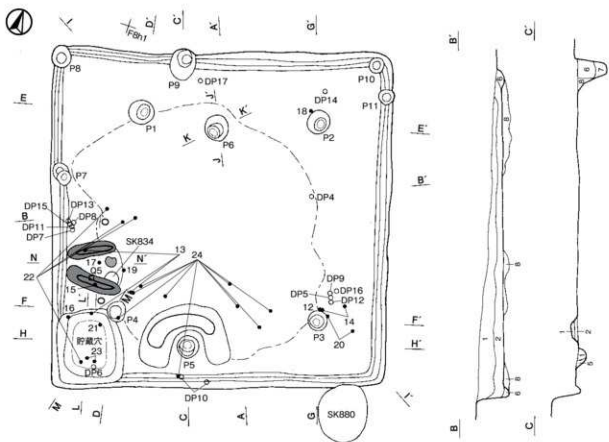
1 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量	6 暗褐色	ロームブロック・砂質粘土ブロック・焼土粒子微量
2 暗褐色	ローム粒子中量	7 暗褐色	ローム粒子多量、焼土ブロック微量
3 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	8 暗褐色	ローム粒子多量
4 褐色	ローム粒子多量、炭化粒子微量	9 褐色	ローム粒子多量
5 暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土ブロック微量		

ピット 11か所。P1～P4は径28～40cm、深さ38～74cmで、規模と配置から主柱穴である。P5は径36cm、深さ17cmで、出入り口施設に係るピットと考えられる。P6は径36～42cm、深さ68cmで、配置から補助柱穴と考えられる。P7～P11は径24～50cm、深さ16～56cmで、壁際に配置していることから壁柱穴と考えられる。

ピット土層解説

1 暗褐色	ロームブロック中量	6 暗褐色	ロームブロック・砂質粘土ブロック中量、焼土ブロック少量
2 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	7 暗褐色	ロームブロック中量、砂質粘土ブロック少量
3 褐色	ロームブロック多量	8 暗褐色	ローム粒子多量、焼土粒子微量
4 褐色	ロームブロック中量		
5 暗褐色	ロームブロック少量		

貯蔵穴 南コーナー部に位置し、長軸118cm、短軸104cmの隅丸長方形で、深さは56cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。ブロック状の堆積状況から、第2～6層は埋め戻されている。第1層は本跡が埋め戻され



A 25.6m



D



E

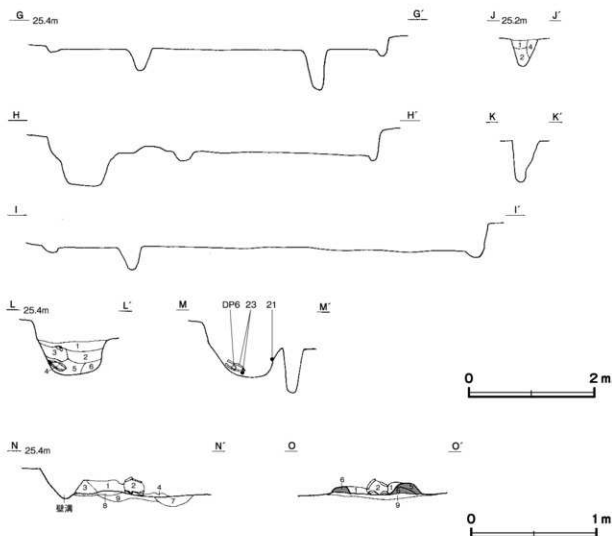


F DP13 DP15 16 Q515 17 19 13 24 DP17 DP10 18 DP4 DP14 12 DP12 14 20 F'



0 2m

第 26 图 第 53 号竖穴建物跡物実測图 (1)



第27図 第53号竪穴建物跡実測図(2)

る際の覆土と考えられる。

貯蔵穴土層解説

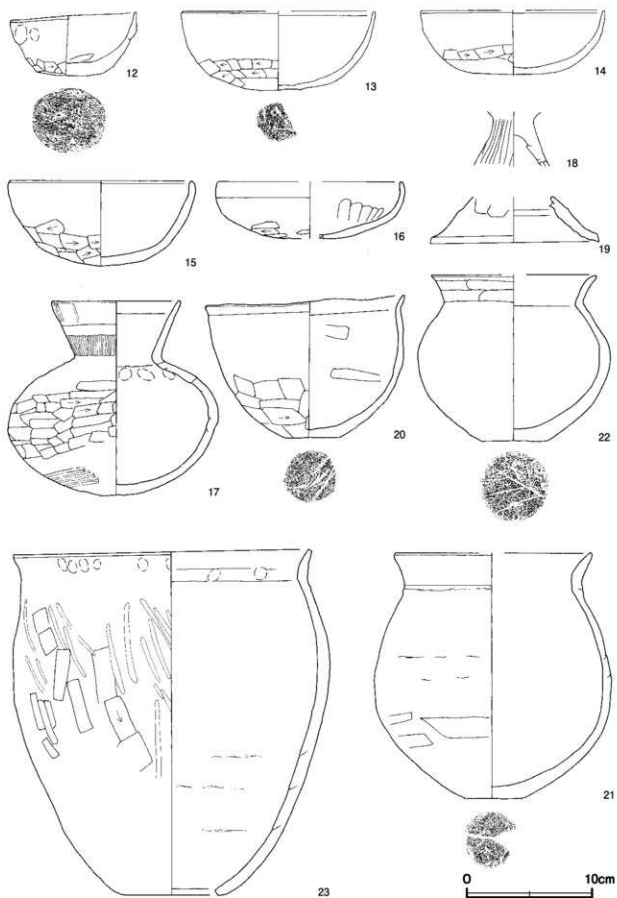
- | | |
|---------------|-----------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子微量 | 4 灰赤色 ローム粒子微量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子中量 | 5 暗褐色 ロームブロック中量 |
| 3 暗褐色 ローム粒子少量 | 6 暗褐色 ロームブロック多量 |

覆土 7層に分層できる。ロームブロックや焼土ブロックが含まれていることから、埋め戻されている。第8・9層は貼床の構築層である。

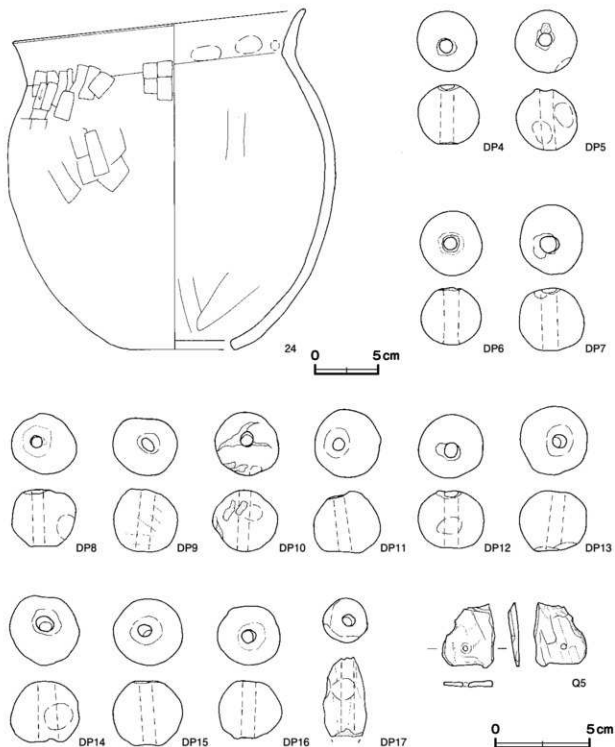
土層解説

- | | |
|------------------------|-----------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子少量 | 6 暗褐色 ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 7 褐色 ローム粒子中量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック少量 | 8 暗褐色 ローム粒子中量 |
| 4 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量 | 9 褐色 ローム粒子多量 |
| 5 暗褐色 ローム粒子少量 | |

遺物出土状況 土師器片542点(坏133, 埴1, 器台1, 高坏5, 鉢1, 甕361, 小形甕35, 瓶5), 土製品20点(土玉14, 管状土錘1, 土器片錘1, 不明4), 石製品1点(有孔円板未成品), 剥片58点(滑石302.96g)のほか、縄文土器片159点(深鉢), 弥生土器片53点(壺), 須恵器片6点(蓋2, 甕4), 陶器片1点(不明)が出土している。17は竈焼部上面から横位で遺棄されていることから、竈塞ぎに伴う祭祀行為の可能性がある。



第28图 第53号竖穴建物跡出土遺物実測図(1)



第29図 第53号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)

DP 7・8・11・13・15は竈右袖部壁際にまともて、DP 5・9・12・16は南東コーナー部にまともて遺棄されていることも廃絶時に伴う祭祀行為の可能性を示唆している。貯蔵穴から出土した21・23は、建物廃絶時に遺棄されたものと考えられる。滑石片は覆土下層から床面にかけて散在した状態で出土している。

所見 時期は、煙道部は壁を掘り込んでいない竈を有している遺構の形態や出土土器から5世紀末葉に比定できる。

第53号竪穴建物跡出土遺物観察表(第28・29図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
12	土師器	坏	9.9	5.3	5.0	長石・石英	橙	普通	内面ヘラナデ 体部下端手持ちヘラ削り	覆土下層	50% PL.5
13	土師器	坏	[152]	6.3	[3.4]	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ 体部ヘラ削り	覆土中層	50% PL.5
14	土師器	坏	[144]	5.1	—	長石・石英	橙	普通	内面摩耗 体部ヘラ削り	覆土下層	50%
15	土師器	坏	14.4	6.8	—	長石・石英・ 白色粒子	橙	普通	口縁部外面摩耗 内面摩耗 体部ヘラ削り	覆土下層	80% PL.5
16	土師器	坏	[146]	4.5	—	長石・石英・ 赤母・赤色粒子	赤	普通	口縁部横ナデ 体部内面ヘラ磨き→ナデ 外面ヘラ削り	覆土下層	40% PL.6
17	土師器	埴	10.2	15.4	—	長石・石英・ 赤母	橙	普通	口縁部から器底にかけて磨削ヘラ磨き 器底内面ナデ 一部分擦削り 外面ヘラ磨き 体部下端ヘラ磨き	敷瓦土下層	100% PL.6
18	土師器	高坏	—	(4.3)	—	長石・石英	橙	普通	脚部外面縦位のヘラ削り	覆土下層	10%
19	土師器	高坏	13.4	(3.4)	—	長石・石英・ 白色粒子	橙	普通	脚部外面縦位のヘラ削り	覆土下層	5%
20	土師器	鉢	15.7	11.4	3.7	長石・石英・ 赤母	明赤陶	普通	口縁部横ナデ 体部下端ヘラ削り 内面ヘラ削り	覆土下層	90% PL.6
21	土師器	甕	[154]	19.6	4.2	長石・石英・ 赤母	灰陶	普通	口縁部横ナデ 体部ヘラ削り	貯蔵穴	60% PL.6
22	土師器	小形甕	[130]	13.2	5.0	長石・石英・ 赤母	明赤陶	普通	口縁部ヘラナデ 体部外面摩耗 底面に木製痕	貯蔵穴・床面	60% PL.6
23	土師器	瓶	23.4	27.4	7.5	長石・石英・ 赤母	にぶい橙	普通	ヘラ磨き→ヘラ削り 口縁部内面に指面押圧	貯蔵穴	90% PL.6
24	土師器	瓶	23.0	26.9	8.3	長石・石英・ 赤母	橙	普通	口縁部横ナデ 内面一部指面押圧 体部外面ヘラ削り	床面	70%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP4	土玉	3.2	3.1	0.7	29.39	長石・石英・ 赤色粒子	にぶい橙	表面ナデ調整 一方からの穿孔	床面	PL10
DP5	土玉	3.3	3.2	0.8	(31.85)	長石・石英・ 赤母	にぶい橙	表面ナデ調整 一部欠損	床面	PL10
DP6	土玉	3.3	3.1	0.8	30.79	長石・石英	にぶい橙	表面ナデ調整 一方からの穿孔	貯蔵穴	PL10
DP7	土玉	3.6	3.2	0.9	38.51	長石・石英・ 赤母	にぶい橙	表面ナデ調整 一方からの穿孔	床面	PL10
DP8	土玉	3.4	3.0	0.6	(31.83)	長石・石英・ 赤母	橙	表面ナデ調整 一部欠損 一方からの穿孔	覆土下層	PL10
DP9	土玉	3.4	3.3	0.8	34.18	長石・石英・ 赤母	にぶい橙	表面ナデ調整 一方からの穿孔	床面	PL10
DP10	土玉	3.5	3.2	0.7	(31.62)	長石・石英	にぶい橙	表面摩耗 一部欠損	覆土中層一 下層	PL10
DP11	土玉	3.6	3.2	0.6	38.11	長石・石英	橙	表面ナデ調整 一方からの穿孔	床面	PL10
DP12	土玉	3.5	3.0	0.7	31.95	長石・石英・ 赤母	にぶい橙	表面ナデ調整 一方からの穿孔	床面	PL10
DP13	土玉	3.6	3.2	0.7	38.70	長石・石英	橙	表面摩耗 一方からの穿孔	覆土下層	PL10
DP14	土玉	3.7	3.2	1.0	(38.76)	長石・石英・ 赤色粒子	にぶい橙	表面ナデ調整 一部欠損 一方からの穿孔	覆土下層	PL10
DP15	土玉	3.7	3.4	0.7	41.15	長石・石英	橙	表面ナデ調整 一方からの穿孔	覆土下層	PL10
DP16	土玉	3.8	3.0	0.7	29.72	長石・石英・ 赤母・赤色粒子	にぶい橙	表面摩耗 一方からの穿孔	床面	PL10

番号	器種	径	長さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP17	管状土師	2.3	(4.2)	0.6	(20.98)	長石・石英	黒	表面ナデ調整 一部欠損	床面	PL10

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q.5	有孔円板	(3.4)	(2.8)	0.6	(3.97)	滑石	片面から穿孔 一部欠損 未成品	覆土下層	PL10

第56号竪穴建物跡(第30図)

位置 調査区のF8f5区、標高25mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第806号土坑を掘り込み、第8号溝に掘り込まれている。

規模と形状 北西・南東軸は3.30m、北東・南西軸は250mしか確認できなかったが、隅丸長方形と推定でき、主軸方向はN-32°-Eである。壁は高さ6cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 北東壁の中央部に付設されている。左袖部のみ遺存しており、焼残部幅は24cmである。袖部は、地山の

上にローム粒子や焼土粒子を含む暗褐色土で基部を作り、砂質粘土ブロックを含む第2層で構築されている。火床面は火熱を受けて赤変硬化している。

遺土層解説

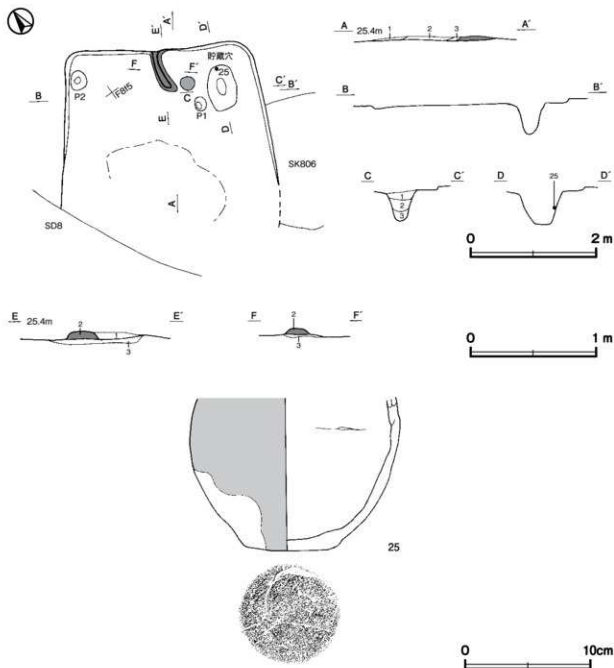
- 1 黒褐色 焼土ブロック・粘土粒子中量、ロームブロック少量 3 暗褐色 ローム粒子微量
2 暗褐色 砂質粘土ブロック多量

ピット 2か所。P1・P2は径18～31cm、深さ31～67cmで、性格は不明である。

貯蔵穴 東コーナー部に位置し、長軸70cm、短軸46cmの隅丸長方形で、深さは51cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。堆積状況とロームブロックを含むことから、埋め戻されている。

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量 3 褐色 ロームブロック中量
2 暗褐色 ロームブロック中量



第30図 第56号堅穴建物跡・出土遺物実測図

覆土 3層に分層できる。ロームブロックなどを含むブロック状の堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック微量 3 黒褐色 焼土ブロック・砂質粘土ブロック中量、ロームブロック少量
 2 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片45点(坏2、甕43)、須恵器片1点(甕)のほか、縄文土器片25点(深鉢)、弥生土器片10点(壺)が出土している。25は貯蔵穴が埋め戻されたときに投棄されたと考えられる。

所見 時期は、出土遺物と当貝塚の古墳時代の堅穴建物跡の主軸方向から5世紀末葉と考えられる。

第56号堅穴建物跡出土遺物観察表(第30図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
25	土師器	甕	-	(12.1)	7.6	長石・石英	にぶい橙	普通	内外面摩耗	貯蔵穴中層	30%

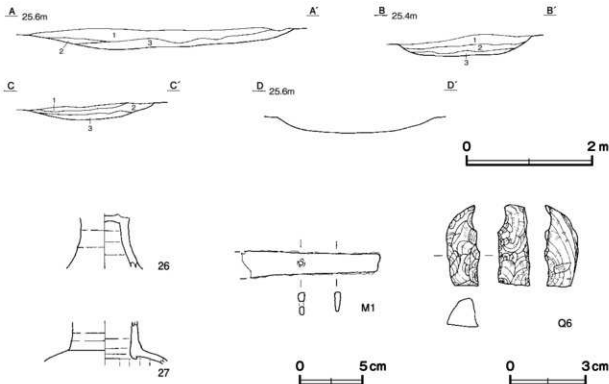
表6 古墳時代堅穴建物跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 長軸×短軸(m)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設			覆土	主な出土遺物	時期	備考		
								柱穴	出入口(ピット)	竈					貯蔵穴	
53	F 881	N-72'-E	方形	5.42×5.38	5-44	平垣	法埋	4	1	6	西壁	1	人為	土師器 土製品 石製品	5世紀末葉	SKR34→本誌 →SK880, PG 3
56	F 815	N-32'-E	3.30×2.50	3.30	6	平垣	-	-	-	2	北東壁	1	人為	土師器 須恵器	5世紀末葉	SKR66→本誌 →317頁

(2) 溝跡

第8号溝跡(第31図)

調査年度 北端部を除く北半部を平成20年度に調査し、当財団調査報告「第330集」にて報告している。



第31図 第8号溝跡・出土遺物実測図

位置 調査区のF 8a5～F 8h7区、標高25mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第42号堅穴建物跡、第816号土坑を掘り込み、第11A号溝、第4・7号道路、第821・862号土坑に掘り込まれている。第4・6号ピット群と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 北東端部が調査区域外へ延びているため、長さは37.32mしか確認できなかった。F 8b4区から北東方向(N-40°-E)へ屈曲しながら延びており、F 8g4区から南東方向(N-63°-W)に延びており、南東端部は第11A号溝跡に切られている。規模は上幅168～386cm、下幅30～173cmで、深さは17～62cmである。断面は浅いU字状で、壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 3層に分層できる。ブロック状の堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
2 にふい黄褐色 ロームブロック少量
3 褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片77点(坏9、高坏2、甕66)、須恵器片6点(高坏2、蓋1、フラスコ瓶1、甕2)、陶器片2点(不明)、土製品2点(土玉、土器片鎌)、剥片1点、鉄製品3点(小刀1、不明2)のほか、縄文土器片174点(深鉢)が出土している。

所見 時期は、出土遺物から、7世紀代には廃絶していたと考えられる。性格は不明である。

第8号溝跡出土遺物観察表(第31図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
26	須恵器	高坏	-	(4.3)	-	長石・石英	灰	普通	ロクロナデ	覆土上層	5% 炭灰混
27	須恵器	73L3罐	-	(3.4)	-	長石・石英	灰白	普通	体部内面ロクロナデ 口頸部から体部に自然軸	覆土中層	10% 炭灰混

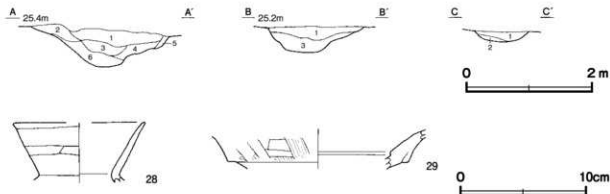
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q6	剥片	3.2	1.3	1.2	5.8g	黒曜石	一方向から敲打による剥離	覆土上層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M1	小刀	(11.0)	(2.1)	0.05	(0.501)	鉄	刀身部欠損 目釘孔1 断面長方形	覆土上層	PL10

第16号溝跡(第32図)

位置 調査区のF 9d4～F 9f2区、標高25mほどの台地緩斜面部に位置している。

重複関係 第24号溝、第6号道路に掘り込まれている。



第32図 第16号溝跡・出土遺物実測図

規模と形状 東端部が調査区域外へ延びているため、長さは1290mしか確認できなかった。溝はF9区から北東方向(N-45°-E)へ直線的に延びている。規模は上幅73～223cm、下幅25～40cmで、深さは16～57cmである。断面は浅いU字状で、壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 6層に分層できる。ブロック状の堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

1 灰褐色	ロームブロック少量	4 暗褐色	ロームブロック少量
2 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	5 褐色	ローム粒子中量
3 暗褐色	ローム粒子中量	6 黒褐色	ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片15点(坏3、高台付坏1、埴2、甕9)のほか、縄文土器片11点(深鉢)が出土している。

所見 時期は、出土遺物から、5世紀代には廃絶していたと考えられる。性格は不明である。

第16号溝跡出土遺物観察表(第32図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
28	土師器	埴	[10.4]	(4.8)	-	長石・石英、雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	ヘラ削り 外面摩耗	覆土中	5%
29	土師器	壺	-	(3.3)	-	長石・石英	橙	普通	毎日調整後ナデ	覆土中	5%

表7 古墳時代溝跡一覧表

番号	位置	方向	平面形	規模				断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					
8	F8a5-F8a7	N-40°-E N-63°-W	L字状	37.32	1.88-3.86	0.30-1.73	17-62	赤・白・灰	織斜	人為	土師器 須恵器 陶器	5S23038・402・415 5S23039・411・434・53021 5S23040
16	F9d4-F9d2	N-45°-E	直線状	1290	0.73-2.23	0.25-0.40	16-57	赤・白・灰	織斜	人為	土師器	4S8→5S24、SF6

4 室町時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、地下式坑1基、溝跡1条、土坑1基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 地下式坑

第1号地下式坑(第33図)

位置 調査区のF9d区、標高24mほどの台地斜面部に位置している。

軸長・軸方向 軸長は3.49mで、軸方向はN-63°-Wである。

壁 主室の東南壁中央部に位置し、奥行き131cm、横幅133cmの不整楕円形である。深さは165cmで、壁は外傾している。底面は主室に向かって緩やかに傾斜しており、主室の底面と50cmの段差がある。

主室 奥行き2.18m、横幅2.70mの長方形である。天井部は崩落しており、確認面から底面までの深さは2.35mである。底面は中央部が4～10cm深さで、窪みの中央には径16～42cm、深さ12～20cmのピット状の掘り込みを2か所確認した。四面の壁はやや内傾して立ち上がり、上半部で内彎しながら、確認面へつながらている。底面から残存している天井部までの高さは、1.30mである。

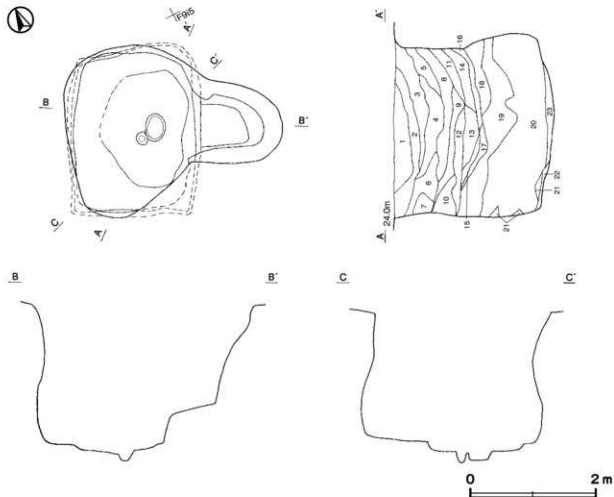
覆土 23層に分層できる。第23層は主室底面の窪みの堆積土であるが、踏み固められていない。第10～22層は天井部や壁の崩落土である。第1～9層は粘土ブロックやローム粒子が不規則に混じる堆積状況であることから、天井部崩落後の窪地が埋め戻されている。

土層解説

1	黒褐色	ロームブロック少量	13	灰褐色	粘土ブロック微量
2	暗褐色	ロームブロック・粘土粒子少量	14	褐色	ロームブロック少量、粘土ブロック微量
3	黒褐色	ロームブロック少量	15	暗褐色	ローム粒子少量
4	黒褐色	ロームブロック中量	16	褐色	ローム粒子少量
5	灰褐色	ロームブロック中量	17	灰褐色	粘土ブロック中量、ローム粒子少量
6	暗褐色	粘土ブロック・ロームブロック少量	18	褐色	粘土ブロック少量
7	灰白色	粘土ブロック多量	19	灰白色	粘土ブロック多量
8	灰褐色	ローム粒子少量	20	明褐色	粘土ブロック多量、黄褐色砂粒少量
9	暗褐色	ローム粒子中量	21	灰褐色	赤色粒子微量
10	灰褐色	粘土ブロック中量、ローム粒子少量	22	灰白色	黄褐色砂粒少量
11	褐色	ローム粒子中量、粘土ブロック少量	23	暗褐色	粘土粒子少量
12	褐色	ローム粒子中量			

遺物出土状況 縄文土器片 48 点（深鉢）、土師器片 27 点（坏 2、甕 25）が第 1～9 層の覆土中から出土している。天井部崩落後、埋め戻された際に混入されたものと考えられる。

所見 遺構に伴う出土遺物はないが、遺構の形態から室町時代と考えられる。性格は不明である。



第 33 図 第 1 号地下式坑実測図

(2) 溝跡

第 7 号溝跡（第 34 図）

調査年度 北端部を除く北半部を平成 20 年度に調査し、「第 330 集」にて報告している。

位置 調査区の F 8 b6～F 8 g7 区、標高 25 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第841・861・864号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長さ21.34mしか確認できなかった。F8d5区から北東方向(N-42°-E)と南東方向(N-26°-W)へ直線的に延びている。規模は上幅38~167cm、下幅18~74cmで、深さは8~35cmである。断面はU字状で、壁は緩やかに立ち上がっている。

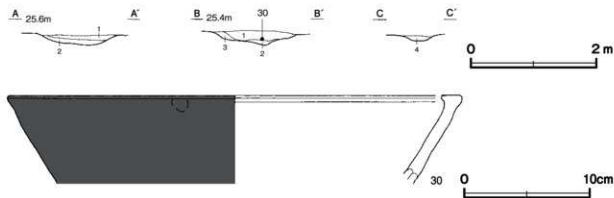
覆土 4層に分層できる。ロームブロックが多く含まれることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------|------|-----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量 | 3 褐色 | ロームブロック多量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック微量 | 4 褐色 | ロームブロック中量 |

遺物出土状況 土師質土器片1点(鍋₉)、陶器片2点(不明)のほか、縄文土器片13点(深鉢)、弥生土器片1点(甕)、土師器片19点(坏1、甕18)、須恵器片1点(甕)が出土している。

所見 時期は、出土遺物の様相から、室町時代と考えられる。性格は不明である。



第34図 第7号溝跡・出土遺物実測図

第7号溝跡出土遺物観察表(第34図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
30	土師土器	鍋	[30.7]	[7.0]	-	長石・石英・赤色粒子	黒褐色	普通	口縁部一部指頭押圧 外面塗付着	覆土上層	5%

(3) 土坑

第788号土坑(第35図)

位置 調査区のG9a4区、標高22mほどの台地斜面部に位置している。

規模と形状 長軸は2.18m、短軸は1.56mの隅丸長方形である。長軸方向はN-43°-Wと推定できる。深さは84cmで、底面は平坦である。壁は外傾している。

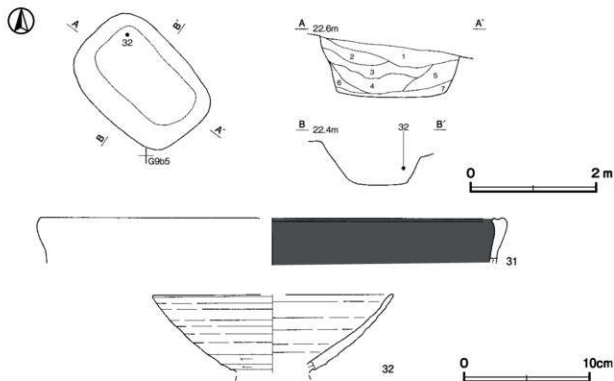
覆土 7層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------------|-------|-----------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | 山砂粒少量、粘土ブロック・焼土粒子微量 | 6 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・粘土粒子微量 |
| 3 黒褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子少量 | 7 灰褐色 | 粘土粒子・山砂粒中量、ロームブロック少量、焼土粒子微量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・粘土ブロック微量 | | |

遺物出土状況 土師質土器片6点(小皿1、焙烙5)、陶器片2点(平碗、甕)のほか、縄文土器片17点(深鉢)、土師器片6点(坏)が出土している。

所見 時期は、出土土器から室町時代と考えられる。性格は不明である。



第35図 室町時代第788号土坑・出土遺物実測図

第788号土坑出土遺物観察表(第35図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
31	土師質土器	磁器	[36.8]	(3.6)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にじみ赤黒	普通	内面厚付き 外面摩耗	覆土中	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴	輪業	産地	出土位置	備考
32	陶器	平碗	[19.0]	(6.2)	-	長石・石英に赤い黄緑	ロクロ成形 前出し高台 体部下縁へタ張り縁・外・内面に施軸	浅黄	瀬戸	覆土中層	40%

5 その他の遺構と遺物

今回の調査で、時期や性格が明らかでない竪穴建物跡2棟、竪穴遺構1基、溝跡21条、道路跡4条、土坑95基、ピット群5か所を確認した。

(1) 竪穴建物跡

第57号竪穴建物跡(第36図)

位置 調査区のG 8b3区、標高25mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第11A号溝跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 南コーナー部は攪乱により確認できなかったが、長軸は3.65m、短軸は2.47mの隅丸長方形と推定できる。主軸方向はN-58°-Wである。壁は高さ4~40cmで、外傾している。

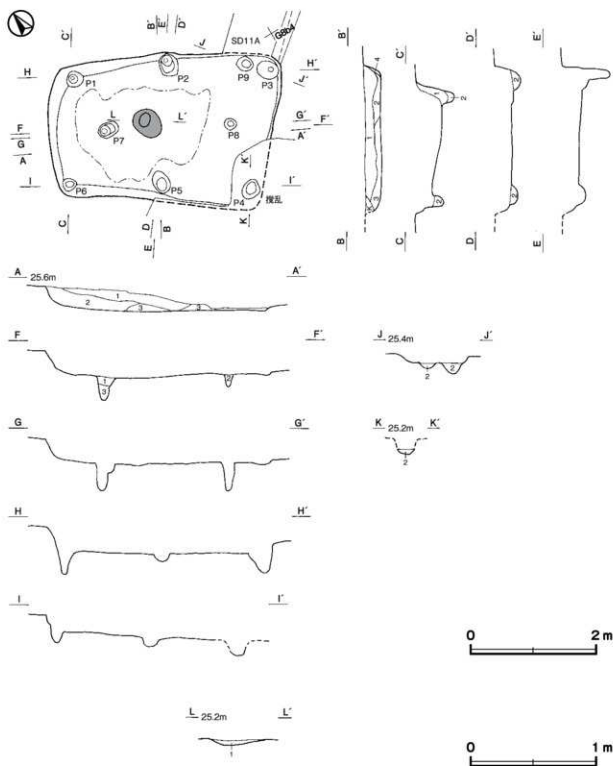
床 平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 はほぼ中央部に付設されている。長径48cm、短径40cmの楕円形で、床面を4cmほど、皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。第1層上面が炉床面である。

炉土層解説

1 黒褐色 ローム粒子中量、炭化物少量、焼土粒子微量

ピット 9か所。P1～P6は径19～36cm、深さ12～52cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P7・P8は径18～33cm、深さ45～47cmで、棟持柱穴と考えられる。P9は径24～28cm、深さ12cmで、性格は不明である。



第36図 第57号竪穴建物跡実測図

ビット土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
2 暗褐色 ロームブロック少量

- 3 暗褐色 ロームブロック微量

覆土 4層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。第4層は壁の崩落土と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量
2 暗褐色 ロームブロック多量

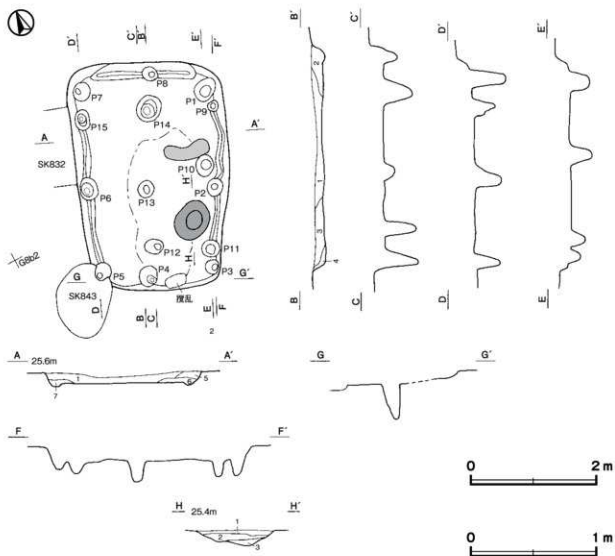
- 3 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
4 褐色 ローム粒子多量

遺物出土状況 縄文土器片 36点(深鉢), 弥生土器片 22点(壺), 土師器片 36点(高坏2, 甕34), 土製品1点(不明)が, 第1~3層の覆土中から出土している。埋め戻された際に混入したものと考えられる

所見 規模や形態から, 住居の付属施設あるいは作業場の可能性がある。伴う遺物が出土していないため時期は不明である。

第58号竪穴建物跡(第37図)

位置 調査区のG 8a2区, 標高25mほどの台地平坦部に位置している。



第37図 第58号竪穴建物跡実測図

重複関係 第832号土坑を掘り込み、第843号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.64m、短軸2.50mの隅丸長方形で、主軸方向はN-22°-Eである。壁は高さ20～25cmで、外傾している。

床 平坦で、中央部から南東部が踏み固められている。壁溝が、南壁際を除いて確認できた。

炉 南東部に付設されている。長径66cm、短径50cmの楕円形で、床面を14cmほど、皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。第1層上面が炉床面である。

炉土層解説

- | | |
|-----------------------|------------------------|
| 1 暗褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量 | 3 暗褐色 炭化物・ローム粒子・焼土粒子少量 |
| 2 褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量 | |

ビット 15か所。P1～P3・P5～P7は径24～38cm、深さ23～58cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P4・P8・P12～P14は径22～43cm、深さ19～56cmで、棟持柱穴と考えられる。P9～P11・P15は径17～32cm、深さ24～35cmで、性格は不明である。

覆土 7層に分層できる。ロームブロックや焼土ブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|--------------------------|--------------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量 | 5 暗褐色 ローム粒子微量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック少量 | 6 暗褐色 ロームブロック多量、焼土ブロック中量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量 | 7 暗褐色 ローム粒子中量 |
| 4 暗褐色 ローム粒子多量 | |

遺物出土状況 縄文土器片54点(深鉢)、弥生土器片11点(壺)、土師器片30点(坏9、甕21)、剥片1点が、第1～7層の覆土中から出土している。いずれも埋め戻された際に混入したものと考えられる。

所見 規模や形態から、住居の付属施設あるいは作業場の可能性がある。時期判断ができる遺物が出土していないため時期は不明である。

表7 その他の堅穴建物跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 長軸×短軸(m)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設				覆土	主な出土遺物	時期	備考	
								柱穴	出入口	ピット	炉					竈
57	G843	N-58°-W	隅丸長方形	3.65×2.47	4-40	平坦	-	6	-	3	1	-	人為	土師器 土製品	-	SD11Aと新田不明
58	G842	N-22°-E	隅丸長方形	3.64×2.50	20-25	平坦	一部	6	-	9	1	-	人為	土師器 剥片	-	SK932→本跡 →SK843

(2) 堅穴遺構

第1号堅穴遺構 (SK903) (第38図)

位置 調査区のF9i5区、標高23mほどの台地斜面部に位置している。

規模と形状 長軸1.73m、短軸1.36mの長方形で、長軸方向はN-35°-Eである。壁は高さ18～42cmで、直立している。

床 平坦で、明らかな硬化面は認められない。

ビット 2か所。P1・2は径16～22cm、深さ20～21cmで、性格は不明である。遺構廃絶時に埋め戻されている。

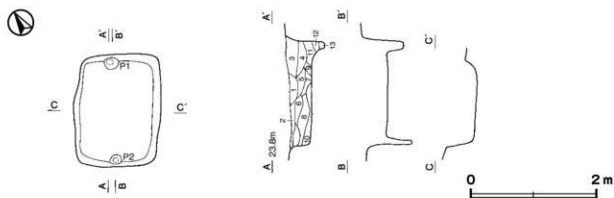
覆土 11層に分層できる。粘土ブロックや赤色粒子が不規則に混じるブロック状の堆積状況から、埋め戻されている。第12・13層はP1の覆土である。

土層解説

- | | | | |
|--------|---------------------|---------|------------------|
| 1 灰 褐色 | ローム粒子・粘土粒子・赤色粒子少量 | 8 暗 褐色 | 粘土粒子多量 |
| 2 暗 褐色 | ローム粒子少量、粘土ブロック微量 | 9 暗 褐色 | 粘土ブロック少量 |
| 3 暗 褐色 | 粘土ブロック・ローム粒子少量 | 10 黒 褐色 | ローム粒子少量、粘土ブロック微量 |
| 4 灰 褐色 | 粘土ブロック・ローム粒子・赤色粒子少量 | 11 黒 褐色 | 粘土粒子少量 |
| 5 灰 褐色 | 粘土ブロック中量、赤色粒子微量 | 12 黒 褐色 | 粘土ブロック少量 |
| 6 暗 褐色 | 粘土ブロック少量、焼土粒子微量 | 13 黒 褐色 | 粘土粒子少量、赤色粒子微量 |
| 7 暗 褐色 | 粘土ブロック多量 | | |

遺物出土状況 縄文土器片 33 点（深鉢），土師器片 3 点（甕）が出土している。土器は、細片のため図示できなかった。

所見 伴う遺物が出土しなかったため、時期は不明である。形状から竪穴遺構と考えられるが、性格は不明である。



第 38 図 第 1 号竪穴遺構実測図

(3) 溝跡 (第 39・40 図)

今回の調査で時期や性格が不明の溝跡 21 条が確認されている。ここでは、土層断面図を掲載し、平面図は遺構配置図に示す。

第 11 A・B・C 号溝跡土層解説

- 1 暗 褐色 ローム粒子微量
- 2 暗 褐色 ローム粒子少量
- 3 暗 褐色 ローム粒子中量
- 4 暗 褐色 ロームブロック中量

第 12 号溝跡土層解説

- 1 暗 褐色 ローム粒子少量
- 2 黒 褐色 ローム粒子少量
- 3 暗 褐色 ローム粒子中量
- 4 黒 褐色 ロームブロック中量
- 5 黒 褐色 ローム粒子多量

第 13 号溝跡土層解説

- 1 黒 褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ロームブロック中量

第 14 号溝跡土層解説

- 1 暗 褐色 ロームブロック少量

第 15 号溝跡土層解説

- 1 暗 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子少量
- 2 暗 褐色 ロームブロック多量
- 3 褐色 ローム粒子多量

第 17 号溝跡土層解説

- 1 暗 褐色 ロームブロック微量
- 2 暗 褐色 ロームブロック少量

第 18 号溝跡土層解説

- 1 暗 褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ローム粒子少量

第 22 号溝跡土層解説

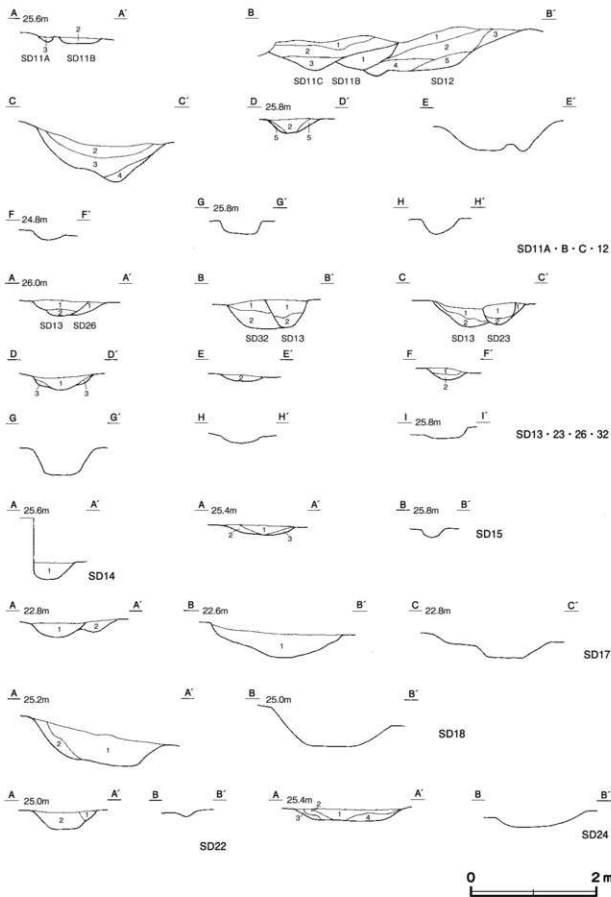
- 1 暗 褐色 ロームブロック少量
- 2 暗 褐色 ローム粒子中量

第 23 号溝跡土層解説

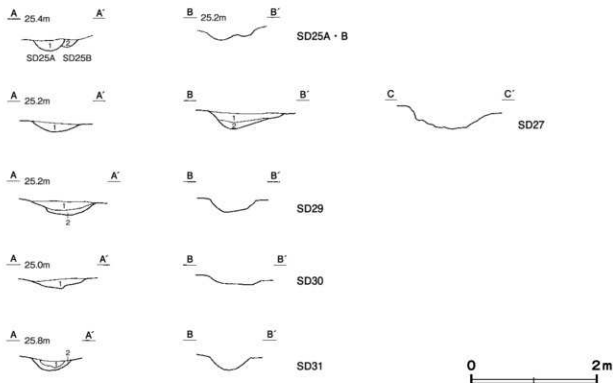
- 1 黒 褐色 ロームブロック微量
- 2 暗 褐色 ロームブロック少量
- 3 暗 褐色 ローム粒子多量

第 24 号溝跡土層解説

- 1 暗 褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子中量
- 3 暗 褐色 ロームブロック少量
- 4 暗 褐色 ロームブロック微量



第 39 図 その他の溝跡実測図 (1)



第40図 その他の溝跡実測図(2)

第25A・B号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量

第26号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量

第27号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量

第29号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 灰褐色 ロームブロック少量

第30号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量

第31号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量

第32号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ロームブロック中量

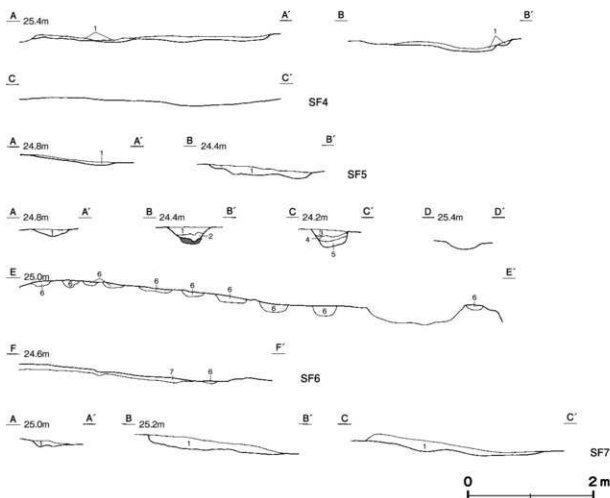
表10 その他の溝跡一覧表

番号	位置	方向	形状	規模				断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					
9	F8a1-F8b3	N-40°-E	直線状	3.56	0.65-0.98	0.51-0.74	11	赤中層	礫砂	入為		
11A	F8a1-G8e1	N-41°-E	[直線状]	(44.80)	0.26-1.12	0.10-0.23	8-32	赤中層	礫砂	入為	縄文土器 弥生土器 土師器 陶器 鉄製品	特→SD10・CF73000 SS2と非対応
11B	G8e2-G7d9	N-48°-E	[直線状]	(19.60)	0.43-0.90	0.18-0.66	8-35	赤中層	礫砂	入為	縄文土器 弥生土器	SD10・SD94・特→SD10
11C	G7d9-G8d2	N-51°-E N-45°-W	[L字状]	(17.35)	0.68-2.10	0.18-0.22	25-46	赤中層	礫砂	入為	縄文土器 弥生土器 土師器 土師器土器 陶器 鉄製品	SD10・P・SD29・特→ 特・SS2と非対応
12	G7d9-G7d9	N-82°-W N-80°-E	[L字状]	(6.08)	0.56-0.80	0.26-0.32	19-62	赤中層	礫砂	入為	縄文土器 弥生土器 土師器 陶器	本層→SD11B SS2 と非対応
13	G7d9-G7B8	N-9°-E N-84°-W	[L字状]	(18.58)	0.62-0.90	0.22-0.26	26-34	赤中層	礫砂	入為	縄文土器 弥生土器 土師器	SD10・特・SS871 →本層→SD10
14	G7d9-G7d5	N-9°-E	[直線状]	(10.42)	0.48-0.65	0.17-0.38	14-25	赤中層	礫砂	入為	縄文土器 鉄貨	
15	F8a7-F8b8	N-52°-W	[直線状]	(5.03)	0.20-0.45	0.07-0.20	15-17	赤中層	礫砂	入為		
17	F9b8-F9d7	N-24°-E	[直線状]	(14.92)	0.80-1.85	0.10-0.23	14-38	混合形	礫砂	入為	縄文土器 磁器	
18	F9d6-F9f1	N-45°-E	[直線状]	(6.43)	1.51-2.11	0.72-0.99	31-49	赤中層	礫砂	入為	縄文土器 土師器	SF 5・6→本層
22	F7B7-G7d5	N-57°-E	[直線状]	(19.90)	0.41-0.85	0.10-0.22	4-25	赤中層	礫砂	入為	土師器	

番号	位置	方向	形状	規模				断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長さ(m)	土幅(m)	下幅(m)	深さ(m)					
23	G7a-G7b	N-32°-W	[直線状]	(22.46)	0.0-0.0	0.16-0.58	21-42	逆台形	紙葺	人為	縄文土器 弥生土器 土師器 鉄製品	SD13・31, SD375-131 05-08 → 48 → SD21
24	F9c-G9f	N-44°-W	[直線状]	(18.87)	1.21-1.65	0.50-1.04	9-19	逆台形	紙葺	人為	縄文土器 陶器 磁器 鉄製品	S06, S075 → 48 → SF4 S081-89
25A	F9c-G9f	N-35°-E	[直線状]	(18.30)	0.30-0.48	0.09-0.25	10-21	逆台形	紙葺	人為	縄文土器	本跡 → SF4
25B	F9c-G9f	N-35°-E	[直線状]	(13.26)	0.25-0.48	0.07-0.20	10-14	直-07状	紙葺	人為	土師器 須恵器 磁器	S0258-859 → 本跡 → SF4
26	G7b-G7d	N-36°-W	[直線状]	11.90	0.54-0.66	0.22-0.56	8-16	直-07状	紙葺	人為	縄文土器	本跡 → SD13, S0872
27	G8c-G8e	N-63°-E	[直線状]	15.14	0.71-1.18	0.25-0.46	14-29	逆台形	紙葺	人為		SD29 → 本跡
29	G8c-G8c	N-47°-W	[直線状]	(4.96)	0.02-1.00	0.22-0.56	12-20	直-07状	紙葺	人為		本跡 → SD27
30	G8c-G8c	N-45°-W	[直線状]	(6.44)	0.01-0.90	0.15-0.46	8-12	直-07状	紙葺	人為	土師器 陶器	S0397 → 本跡
31	G8c-G7f	N-31°-E	[直線状]	(20.32)	0.31-0.68	0.11-0.37	15-28	U字状	紙葺	人為	縄文土器 土師器	S0791-841, 851 → 本跡 → SD24, S0770
32	G7c-G7f	N-25°-W	[直線状]	(3.10)	0.32-0.68	0.22-0.30	12-46	直-07状	紙葺	人為	縄文土器 弥生土器 土師器	S0687 → 本跡 → SD13

(4) 道路跡(第41図)

今回の調査で時期や性格が不明の道路跡4条が確認されている。ここでは、土層断面図を掲載し、平面図は遺構配置図に示す。



第41図 その他の道路跡実測図

第4号道路跡土層解説

1 黒褐色 土 ローム粒子少量

第5号道路跡土層解説

1 黒褐色 土 ロームブロック少量

第7号道路跡土層解説

1 暗褐色 土 ロームブロック・炭化ブロック少量

第6号道路跡土層解説

1 暗褐色 土 ローム粒子多量
 2 暗褐色 土 ロームブロック少量
 3 褐色 土 焼土ブロック少量
 4 褐色 土 ローム粒子多量
 5 褐色 土 焼土粒子少量
 6 暗褐色 土 粘土ブロック少量、ローム粒子・赤色粒子少量
 7 褐色 土 ローム粒子中量

表9 その他の道路跡一覧表

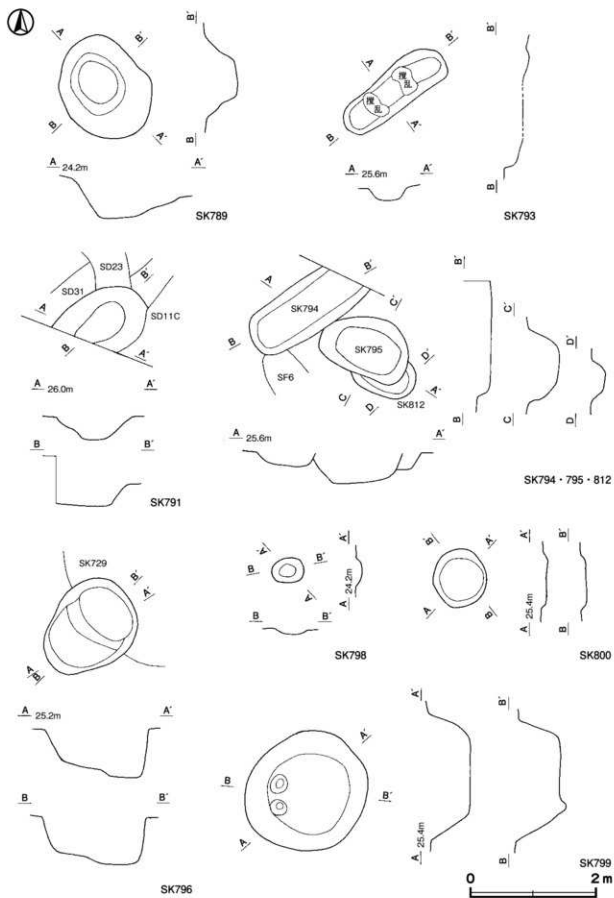
番号	位置	方向	形状	規模				断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					
4	F 8a5-F 8b0	N-48°-W N-27°-E	Y字状	(86.60)	665-162	-	2-19	赤中層	磁斛	人為	縄文土器 土師器 土師質土器 陶器 銅器	SD07-30-32-33-34-35-36-37-38-39-40-41-42-43-44
5	F 9f8-F 9f2	N-32°-E	直線状	(15.85)	110-159	660-688	4-12	赤中層	磁斛	人為	土師質土器 鉄製品	SD14→本跡→SD10・SD11・SD12
6	F 9d2-F 9d6	N-45°-W	直線状	25.93	010-071	018-046	8-13	混合形	磁斛	人為	縄文土器 土師器 須恵器	SD14→本跡→SD15・SD16・SD17
7	F 8g8-F 8g3	N-46°-E	[直線状]	(15.00)	016-218	-	2-18	赤中層	磁斛	人為	土師器 須恵器 鉄製品	SD 9-11A・SK886→本跡

(5) 土坑(第42～51図)

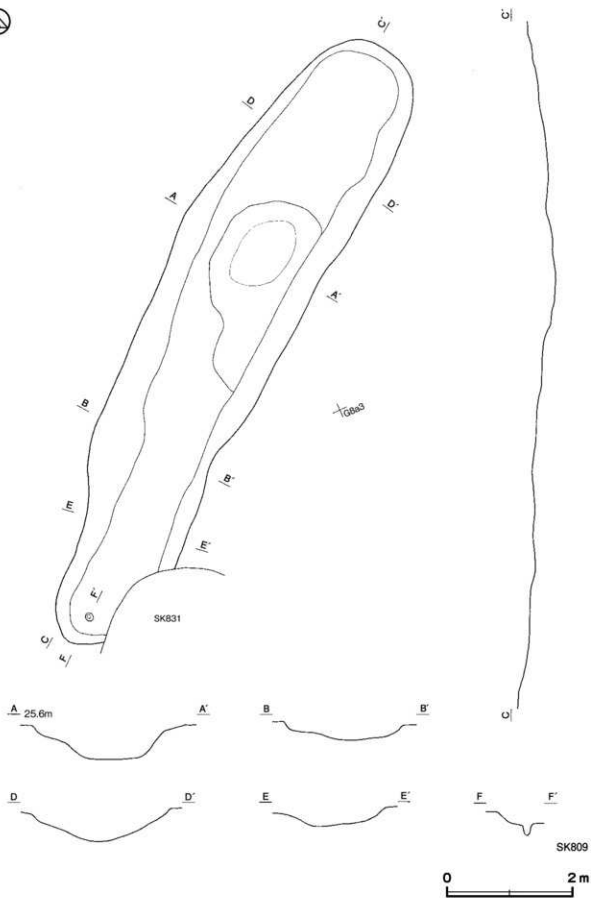
今回の調査で、時期や性格が不明な土坑 95 基を確認した。これらの土坑の規模や形状等について、実測図、土層解説と一覧表を掲載する。

表8 その他の土坑一覧表

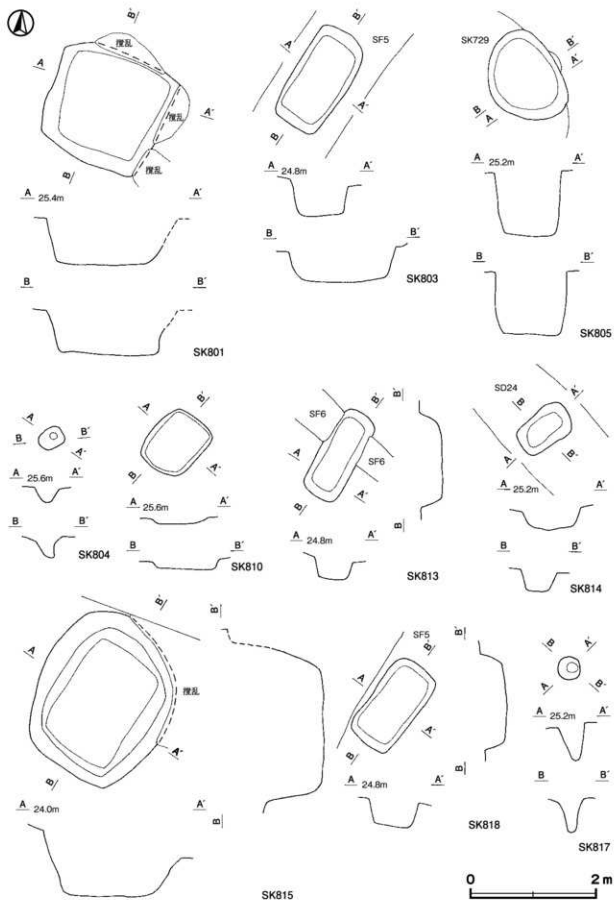
番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
789	F 9d3	N-28°-W	楕円形	1.70×1.32	46-50	平坦	磁斛	人為	縄文土器 須恵器	
791	G 7f8	N-48°-E	[楕円形]	(1.12)×1.10	36	平坦	磁斛	単層	土師器 陶器	SD23・31→本跡→SD11C
793	G 8f1	N-51°-E	楕円形	1.88×0.58	20	凹状	磁斛	人為	縄文土器 赤土土器	
794	F 9c3	N-60°-E	[楕丸長方形]	(1.86)×0.82	20	平坦	磁斛	自然	縄文土器	
795	F 9d3	N-74°-W	楕円形	1.48×0.96	48	凹状	外堀	自然	縄文土器 甕	SK812→本跡→SK794
796	F 8g1	N-45°-E	楕円形	1.62×1.30	74	平坦	有段	人為	縄文土器 土師器 土製品	SK729→本跡
798	F 9d3	N-76°-E	楕円形	0.50×0.38	8	凹状	磁斛	自然		
799	F 8c9	N-53°-E	楕円形	2.00×1.82	65-68	平坦	磁斛	人為		
800	F 9e2	N-0°-E	楕円形	0.93×0.84	10	平坦	磁斛	自然		
801	F 9e5	N-67°-W	方形	1.74×1.78	70	平坦	外堀	人為	土製品	
803	F 9f4	N-32°-E	長方形	1.71×0.89	53	外堀	平坦	人為	縄文土器 土師器 陶器	SF 5→本跡
804	F 8b8	N-44°-E	楕円形	0.42×0.30	32	凹状	外堀	自然	土師器	
805	F 8g2	N-36°-W	楕円形	1.48×1.16	100	平坦	外堀	人為	縄文土器 土師器 土製品	SK729→本跡
809	F 8f2	N-53°-E	楕円形	10.65×2.38	57	凹状	磁斛	人為	縄文土器 赤土土器 土師器 須恵器 石製品	本跡→SK831
810	F 7f0	N-40°-E	長方形	1.06×0.86	16	平坦	磁斛	自然		
812	F 9d3	N-70°-W	[楕円形]	(1.02)×(0.60)	20	凹状	磁斛	自然		本跡→SK795
813	F 9f5	N-33°-E	楕丸長方形	1.49×0.64	32	平坦	外堀	人為	縄文土器	本跡→SF 6
814	F 9f3	N-54°-E	楕丸長方形	0.90×0.60	32	平坦	外堀	人為	縄文土器 土師器 鉄貨	SD24→本跡
815	F 9f7	N-33°-E	[楕丸長方形]	2.56×2.12	120	平坦	外堀	人為	赤土土器	
816	F 8e4	-	不定形	(3.52)×(0.20)	13-23	平坦	磁斛	人為		SD2→本跡→SD 8



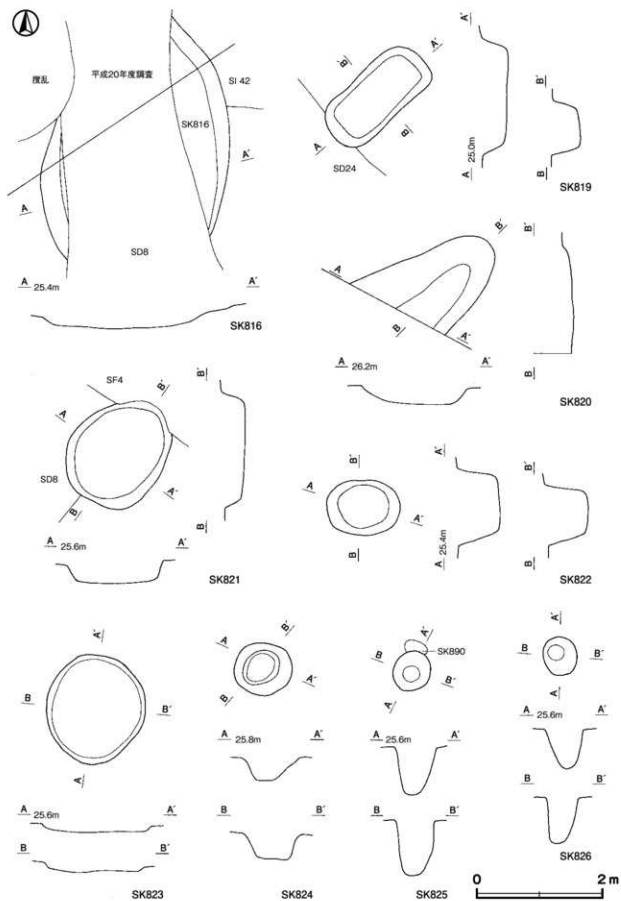
第42図 その他の土坑実測図(1)



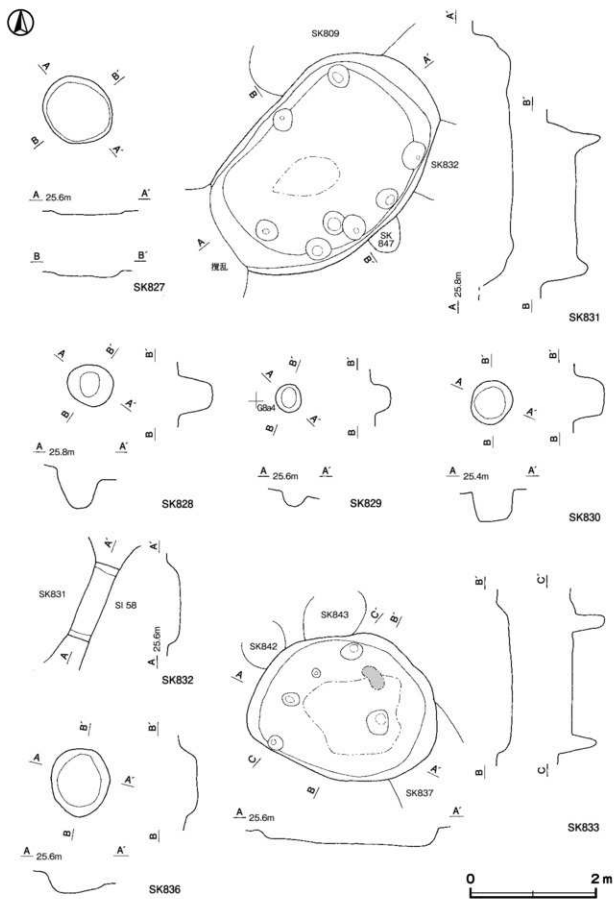
第43図 その他の土坑実測図(2)



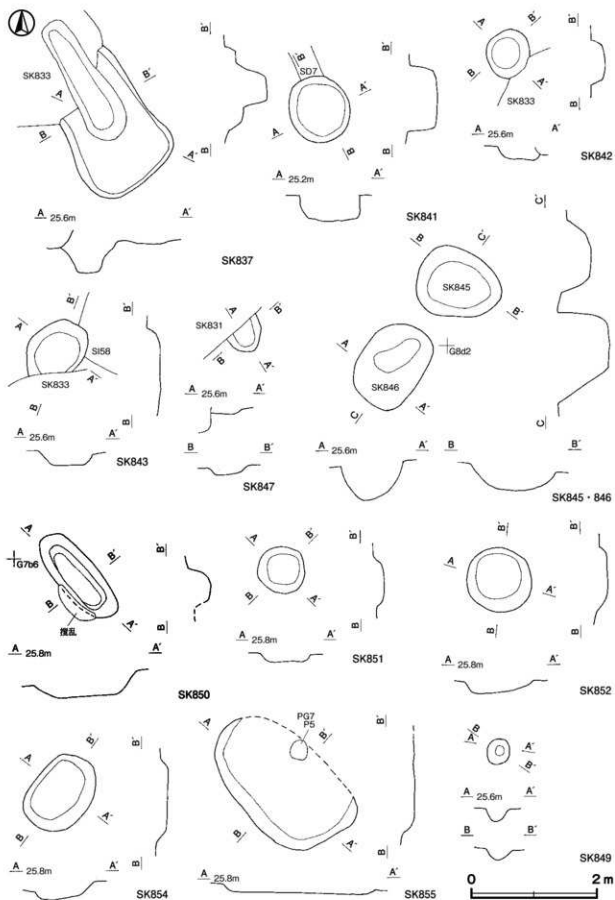
第44図 その他の土坑実測図(3)



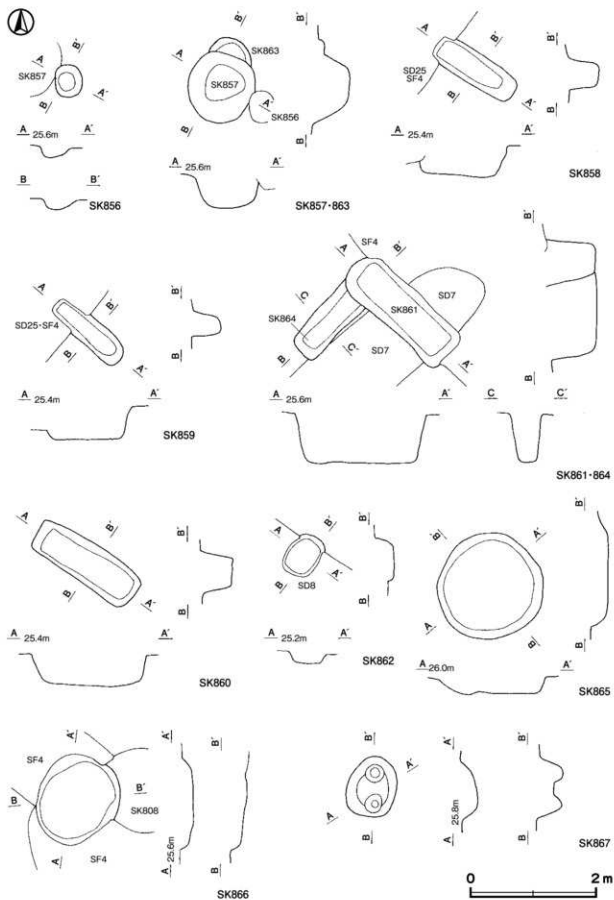
第45図 その他の土坑実測図(4)



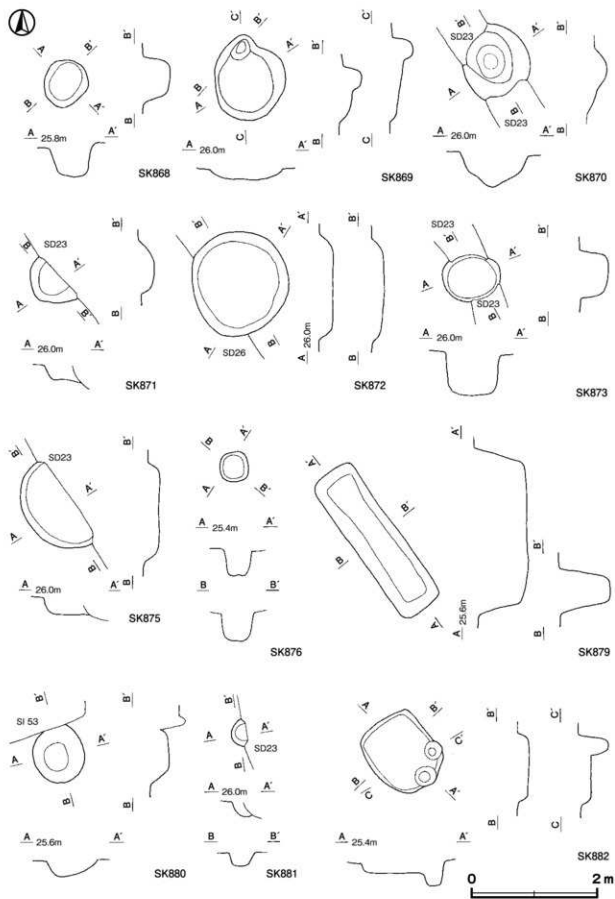
第46図 その他の土坑実測図(5)



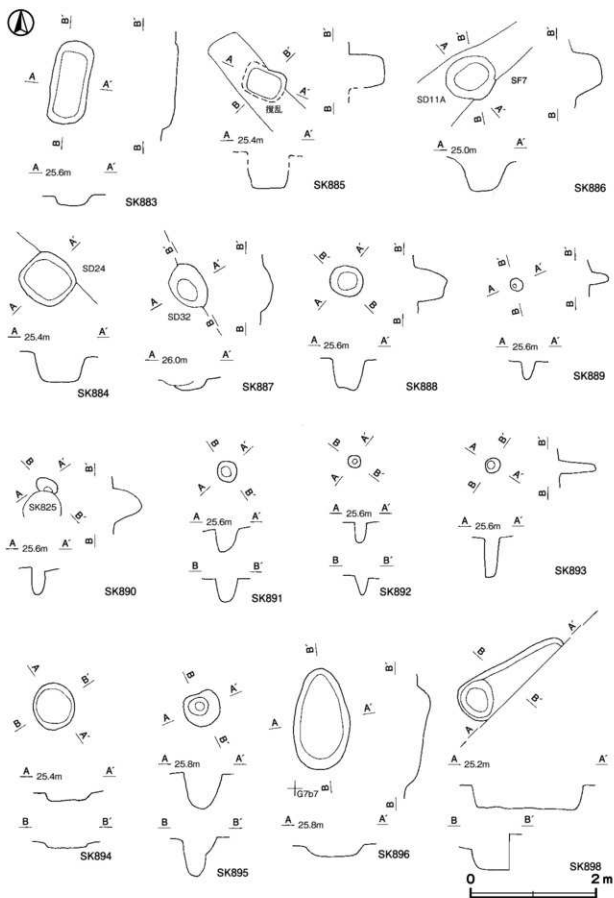
第47図 その他の土坑実測図(6)



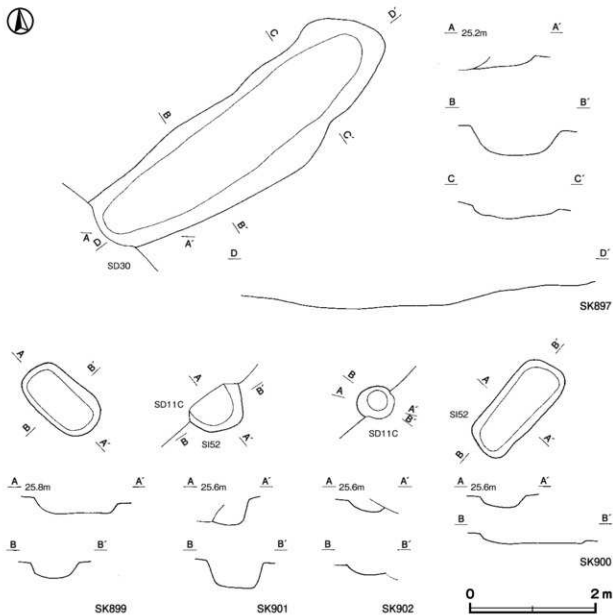
第 48 図 その他の土坑実測図 (7)



第49図 その他の土坑実測図(8)



第50図 その他の土坑実測図(9)



第51図 その他の土坑実測図(10)

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
817	F 9 e4	-	円形	0.38 × 0.37	55	皿状	直立	人為		
818	F 9 g4	N - 34° - E	長方形	1.51 × 0.80	41	平坦	外傾	人為	縄文土器 磁器	SF 5 → 本跡
819	F 9 f4	N - 47° - E	隅丸長方形	1.86 × 0.86	46	平坦	外傾	人為	縄文土器 土師器	SI24 → 本跡
820	G 7 f7	N - 40° - E	不定形	(1.74) × 1.40	26	平坦	縦斜	自然	縄文土器 弥生土器 土師器	
821	F 8 b5	N - 34° - E	楕円形	1.82 × 1.50	36	平坦	外傾	人為	縄文土器 土師器 須恵器 鏡片	SD 8 → 本跡 → SF 4
822	F 8 d6	N - 74° - W	楕円形	1.20 × 0.90	64	平坦	外傾	人為		
823	G 8 a2	N - 3° - E	楕円形	1.72 × 1.58	8 - 13	平坦	縦斜	自然	縄文土器 土師器	
824	F 8 h4	-	円形	0.88 × 0.82	40	平坦	外傾	人為	縄文土器	
825	F 8 β	N - 21° - E	楕円形	0.66 × 0.58	92	平坦	直立	人為	縄文土器 鏡片	SK890 → 本跡
826	F 8 i4	N - 28° - W	楕円形	0.60 × 0.51	77	皿状	直立	人為	縄文土器 土師器	

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
827	F 8j4	N-39°-W	楕円形	1.13 × 1.01	6-10	平坦	緩斜	自然	縄文土器	
828	G 8a4	N-63°-W	楕円形	0.73 × 0.62	52	平坦	外傾	人為	縄文土器	
829	F 8j4	-	円形	0.44 × 0.42	28	皿状	直立	自然		
830	F 8a6	-	円形	0.68 × 0.66	50	平坦	外傾	人為		
831	G 8a1	N-31°-E	楕円形	4.08 × 2.66	60	平坦	外傾	人為	縄文土器 弥生土器 土師器 土製品 瓦片	SK809・832・ 847 → 本跡
832	G 8a2	-	-	1.26 × (0.38)	18	平坦	緩斜	人為	縄文土器 土師器	本跡 → SK833
833	G 8b2	N-73°-W	楕円形	2.98 × 2.37	30	平坦	緩斜	人為	縄文土器 弥生土器 土師器 土製品	SK837・842・ 843 → 本跡
836	F 8b5	N-5°-E	楕円形	1.09 × 0.94	22	皿状	緩斜	人為	縄文土器	
837	G 8b2	N-30°-W	[長方形]	(2.88) × 1.57	70	平坦	外傾	人為	縄文土器 弥生土器 土師器	SES8 → 本跡 → SK833
841	F 8a7	N-59°-E	楕円形	1.06 × 0.96	44	平坦	外傾	人為	縄文土器 磁器	SD 7 → 本跡
842	G 8b1	N-13°-E	楕円形	0.78 × 0.70	20	平坦	外傾	人為	縄文土器	本跡 → SK833
843	G 8b2	N-36°-E	[楕円形]	0.98 × (0.85)	22	平坦	緩斜	自然	縄文土器	本跡 → SK833
845	G 8c2	N-74°-W	楕円形	1.37 × 1.12	40	平坦	緩斜	人為	縄文土器	
846	G 8d1	N-39°-E	楕円形	1.43 × 1.02	81	平坦	緩斜	人為	縄文土器	
847	G 8a2	N-20°-E	[方形]	0.62 × (0.40)	12	平坦	緩斜	自然	土師器	本跡 → SK831
849	G 7e9	N-29°-E	楕円形	0.41 × 0.36	16	平坦	緩斜	人為	縄文土器	
850	G 7b6	N-41°-W	楕円形	1.65 × 0.62	35	平坦	緩斜	人為	縄文土器	
851	G 8c1	-	円形	0.78 × 0.77	16	平坦	緩斜	人為		
852	G 8c1	-	円形	1.08 × 1.00	18	平坦	緩斜	人為		
854	G 7b9	N-35°-E	楕円形	1.30 × 0.94	20	平坦	緩斜	人為	縄文土器	
855	G 7b8	N-42°-W	[楕円形]	2.53 × (1.48)	15	平坦	緩斜	人為	縄文土器 陶器 粘土塊	EG 7 と 新田不 詳
856	F 8j4	N-8°-W	楕円形	0.50 × 0.43	16	平坦	外傾	人為	縄文土器 土師器	SK857 → 本跡
857	F 8j4	N-18°-E	楕円形	1.10 × 1.00	56	平坦	緩斜	人為	縄文土器	SK863 → 本跡 → SK859
858	F 8d0	N-57°-W	隅丸長方形	1.42 × 0.48	47	平坦	緩斜	人為	磁器	本跡 → SD25B・ SF 4
859	F 8c0	N-48°-W	隅丸長方形	1.36 × 0.40	46	平坦	直立	人為		本跡 → SD25B・ SF 4
860	F 8e0	N-28°-W	隅丸長方形	1.80 × 0.62	46	平坦	緩斜	人為	縄文土器 磁器	
861	F 8b6	N-44°-W	隅丸長方形	2.08 × 0.72	78	平坦	外傾	人為	須恵器 陶器	SD 7・SK864 → 本跡 → SF 4
862	F 8b6	N-26°-E	隅丸長方形	0.67 × 0.54	18	平坦	外傾	人為	縄文土器 土師器	本跡 → SD 8
863	F 8j4	-	[円形]	0.70 × (0.26)	(10)	平坦	外傾	人為		本跡 → SK867
864	F 8b6	N-45°-E	[隅丸長方形]	(1.20) × 0.50	80	平坦	外傾	人為	縄文土器	SD 7 → 本跡 → SK861・SF 4
865	G 7d6	-	円形	1.68 × 1.65	15-23	平坦	外傾	人為	縄文土器	
866	F 8b6	N-15°-E	楕円形	1.40 × 1.28	14	平坦	直立	自然	縄文土器 土師器	SK868 → 本跡 → SF 4
867	G 7b7	N-11°-E	楕円形	0.95 × 0.81	25	平坦	緩斜	人為	縄文土器	
868	G 7b7	-	円形	0.74 × 0.68	48	平坦	外傾	人為	縄文土器 土師器 土製品	
869	G 7b7	N-4°-W	楕円形	1.35 × 1.12	19	平坦	緩斜	人為	縄文土器 土師器 粘土塊	
870	G 7c6	-	[円形]	1.08 × (1.05)	48	皿状	緩斜	人為		本跡 → SD23
871	G 7f7	N-39°-W	[楕円形]	0.84 × (0.48)	24	皿状	緩斜	人為	縄文土器 鉄製品	本跡 → SD23
872	G 7e9	-	円形	1.60 × 1.58	20	平坦	緩斜	人為		SD26 → 本跡
873	G 7d7	N-70°-E	[楕円形]	0.92 × (0.72)	46	皿状	外傾	人為	縄文土器	本跡 → SD23
875	G 7d7	N-33°-W	[楕円形]	1.50 × (0.78)	18	平坦	外傾	人為	縄文土器	本跡 → SD23
876	F 9c1	-	円形	0.50 × 0.49	45	平坦	緩斜	人為	縄文土器	本跡 → SD24
879	F 8d7	N-35°-W	長方形	2.62 × 0.74	76	平坦	直立	人為	縄文土器 土師器	
880	F 8i2	N-11°-E	楕円形	0.88 × 0.80	28	平坦	外傾	人為	縄文土器	SIS3 → 本跡
881	G 7e7	N-6°-W	[楕円形]	0.40 × (0.24)	20	皿状	緩斜	人為		本跡 → SD23

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
882	F 7 f0	N-40°-W	長方形	1.32 × 1.08	16	平坦	外傾	人為	縄文土器 土師器	
883	F 7 f0	N-10°-E	隅丸長方形	1.32 × 0.60	16	皿状	外傾	人為	土師器	
884	F 9 d1	N-47°-W	方形	0.80 × 0.78	45	平坦	外傾	-		SD24と新田不明
885	F 8 e7	N-67°-W	[隅丸長方形]	(0.68) × (0.46)	32	平坦	外傾	人為	礎	
886	F 8 g7	N-51°-E	[楕円形]	(0.79) × (0.70)	43	平坦	直立	人為		本跡→SD11ASF 7
887	G 7 d8	N-31°-W	[楕円形]	0.80 × (0.52)	16	皿状	外傾	人為	縄文土器	本跡→SD32
888	F 8 j1	-	円形	0.51 × 0.49	47	平坦	縦斜	人為	縄文土器	
889	F 8 j4	-	円形	0.22 × 0.22	30	皿状	外傾	人為		
890	F 8 j3	N-75°-W	[楕円形]	0.37 × (0.18)	43	皿状	直立	人為		本跡→SK825
891	F 8 j3	-	円形	0.35 × 0.34	36	皿状	外傾	人為		
892	F 8 j2	-	円形	0.20 × 0.19	29	皿状	直立	人為		
893	G 8 a3	-	円形	0.22 × 0.22	63	平坦	直立	人為		
894	F 8 f3	N-34°-W	楕円形	0.74 × 0.66	8	皿状	直立	人為		
895	G 7 b7	-	円形	0.58 × 0.55	60	皿状	外傾	人為	土師器	
896	G 7 a7	N-2°-W	楕円形	1.60 × 0.90	18	平坦	縦斜	人為	縄文土器	
897	G 8 e4	N-53°-E	楕円形	(5.42) × 1.62	44	皿状	外傾	自然	縄文土器 土師器 陶器 鉄滓	
898	G 8 b6	N-59°-E	[楕円形]	1.90 × (0.68)	37	平坦	縦斜	人為	縄文土器 土師器	
899	G 7 f8	N-45°-W	隅丸長方形	1.36 × 0.76	24	皿状	直立	人為		
900	G 7 f0	N-32°-E	隅丸長方形	1.74 × 0.72	19	平坦	外傾	人為	縄文土器 弥生土器 土師器	SE2と新田不明
901	G 7 f0	-	[楕円形]	0.96 × (0.63)	40	平坦	縦斜	人為	縄文土器	本跡→SD11C SE2と新田不明
902	G 7 f0	N-65°-W	楕円形	0.58 × 0.52	19	皿状	縦斜	人為	土師器	本跡→SD11C

(6) ビット群

第3号ビット群 (第52図)

位置 調査区のF 8 h1～F 8 i3区の東西5m、南北5mの範囲から、21か所のビットが確認できた。標高25mほどの台地平坦部に位置している。

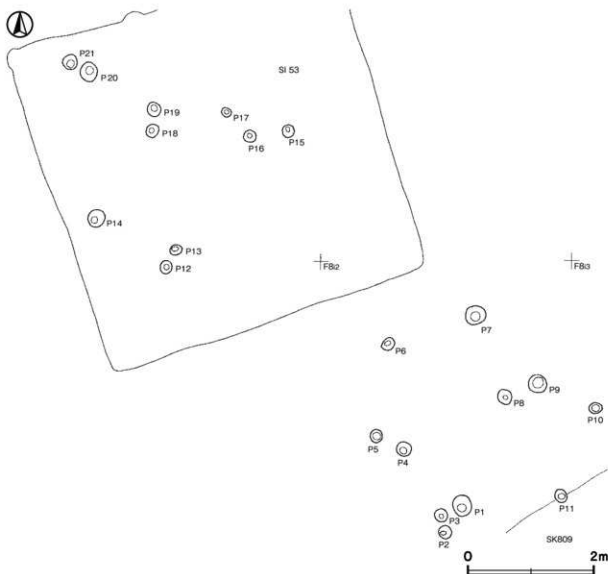
重複関係 第53号竪穴建物跡を掘り込んでいる。第809号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。

遺物出土状況 縄文土器片1点(深鉢)、弥生土器片3点(壺)、土師器片6点(甕)が出土している。

所見 分布状況から建物は想定できず、時期・性格ともに不明である。

第3号ビット群ビット計測表 (第52図)

番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径×短径	深さ					長径×短径	深さ					長径×短径	深さ	
1	F 8 i2	円形	35 × 30	18	8	F 8 i2	楕円形	25 × 22	43	15	F 8 h1	円形	20 × 19	19			
2	F 8 i2	円形	22 × 20	33	9	F 8 i2	円形	30 × 30	16	16	F 8 h1	円形	21 × 20	34			
3	F 8 i2	円形	22 × 20	13	10	F 8 i3	楕円形	23 × 15	14	17	F 8 h1	円形	16 × 15	23			
4	F 8 i2	円形	24 × 24	28	11	F 8 i2	円形	22 × 17	16	18	F 8 h1	楕円形	23 × 20	9			
5	F 8 i2	円形	21 × 21	13	12	F 8 i1	円形	30 × 20	45	19	F 8 h1	楕円形	24 × 21	13			
6	F 8 i2	楕円形	24 × 20	12	13	F 8 h1	楕円形	20 × 16	18	20	F 8 h1	楕円形	33 × 29	34			
7	F 8 i2	楕円形	32 × 28	15	14	F 8 h1	円形	27 × 27	51	21	F 8 h1	円形	25 × 24	48			



第52図 第3号ピット群実測図

第4号ピット群 (第53図)

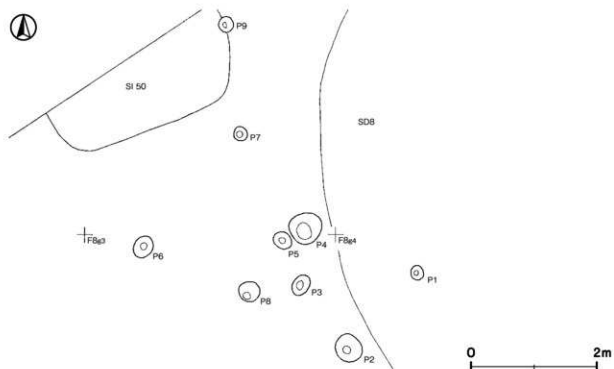
位置 調査区のF 8h3～F 8g4区の東西6m、南北6mの範囲から、9か所のピットが確認できた。標高25mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第50号堅穴建物跡を掘り込んでいる。第8号溝跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

所見 分布状況から建物は想定できず、時期・性格ともに不明である。

第4号ピット群ピット計測表 (第53図)

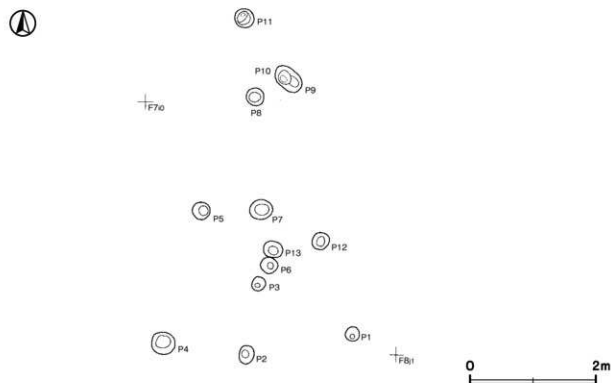
番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)					
			長径×短径	深さ					長径×短径	深さ	長径×短径				深さ					
1	F 8g4	楕円形	22	×	19	47	4	F 8g	楕円形	54	×	49	26	7	F 8g	円形	22	×	21	15
2	F 8g1	円形	45	×	43	66	5	F 8g3	楕円形	33	×	26	25	8	F 8g3	円形	34	×	31	56
3	F 8g3	楕円形	36	×	27	30	6	F 8g3	円形	34	×	33	49	9	F 8g	円形	24	×	24	35



第53図 第4号ピット群実測図

第5号ピット群 (第54図)

位置 調査区のF7h0～F7i0区の東西4m、南北6mの範囲から、13か所のピットが確認できた。標高25mほどの台地平坦部に位置している。



第54図 第5号ピット群実測図

遺物出土状況 縄文土器片2点(深鉢),土師器片2点(坏,甕),須恵器片1点(甕),鉄滓1点が出土している。
所見 分布状況から建物は想定できず,時期・性格ともに不明である。

第5号ピット群ピット計測表(第54図)

番号	位置	形状	規模(cm)		番号	位置	形状	規模(cm)		番号	位置	形状	規模(cm)	
			長径×短径	深さ				長径×短径	深さ				長径×短径	深さ
1	F 7f0	円形	23 × 23	15	6	F 7f0	円形	26 × 25	27	10	F 7f0	円形	30 × 30	75
2	F 7f0	楕円形	30 × 24	25	7	F 7f0	楕円形	35 × 30	23	11	F 7f0	円形	30 × 29	23
3	F 7f0	円形	22 × 22	13	8	F 7f0	円形	29 × 28	20	12	F 7f0	楕円形	27 × 24	11
4	F 7f0	楕円形	38 × 33	23	9	F 7f0	楕円形	27 × (20)	51	13	F 7f0	楕円形	30 × 25	13
5	F 7f0	円形	27 × 25	50										

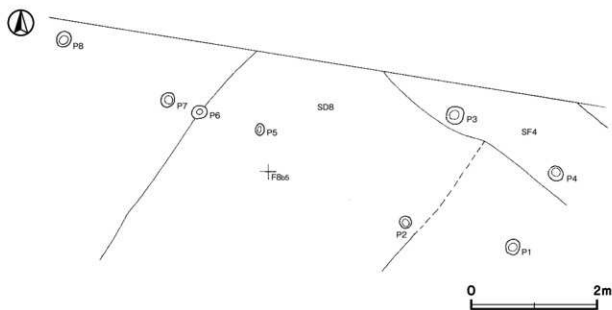
第6号ピット群(第55図)

位置 調査区のF 8a4～F 8b6区の東西9m,南北5mの範囲から,8か所のピットが確認できた。標高25mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第8号溝跡,第4号道路跡と重複しているが,新旧関係は不明である。

遺物出土状況 縄文土器片1点(深鉢),土師器片2点(坏)が出土している。

所見 分布状況から建物は想定できず,時期・性格ともに不明である。



第55図 第6号ピット群実測図

第6号ピット群ピット計測表(第55図)

番号	位置	形状	規模(cm)		番号	位置	形状	規模(cm)		番号	位置	形状	規模(cm)	
			長径×短径	深さ				長径×短径	深さ				長径×短径	深さ
1	F 8b5	楕円形	26 × 23	28	4	F 8b6	円形	23 × 23	20	7	F 8a4	円形	25 × 23	34
2	F 8b5	円形	20 × 19	39	5	F 8a4	楕円形	19 × 15	9	8	F 8a4	円形	26 × 24	17
3	F 8a5	円形	30 × 28	12	6	F 8a4	楕円形	25 × 20	38					

第7号ピット群 (第56図)

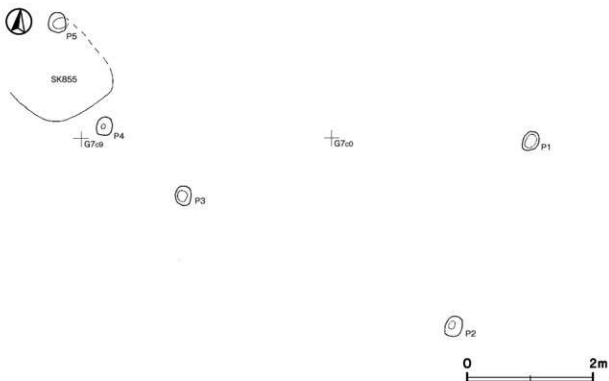
位置 調査区のG7b8～G7c0区の東西9m、南北8mの範囲から、5か所のピットが確認できた。標高25mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第855号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。

所見 分布状況から建物は想定できず、時期・性格ともに不明である。

第7号ピット群ピット計測表 (第56図)

番号	位置	形状	規模 (cm)	
			長径×短径	深さ
1	G7c0	楕円形	34 × 25	47
2	G7c0	楕円形	34 × 28	53
3	G7c0	円形	30 × 28	56
4	G7b9	楕円形	32 × 27	17
5	G7b8	楕円形	34 × 30	51



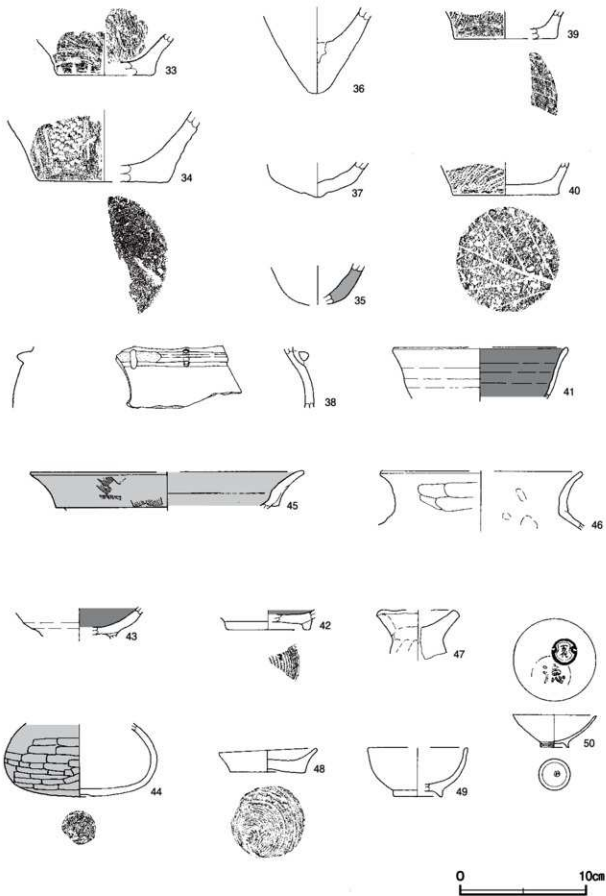
第56図 第7号ピット群実測図

表10 その他のピット群一覧表

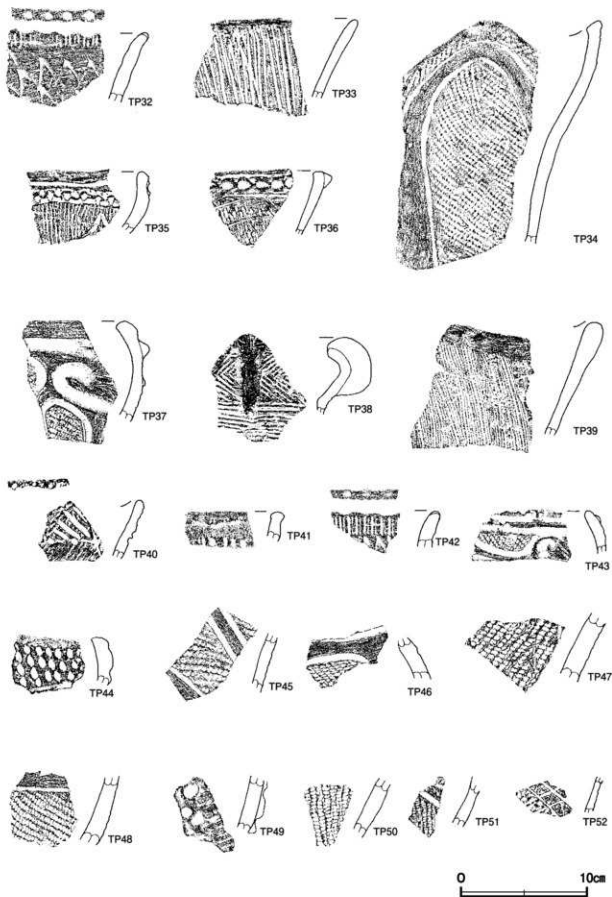
番号	位置	範囲 (m)	柱穴数	柱穴形状	径 (cm)	深さ (cm)	主な出土遺物	備考
3	F8h1～F8i3	5×5	21	円形・楕円形	9～35	12～51	弥生土器 土師器	SS3→本誌 SK889と新旧不明
4	F8i3～F8g4	6×6	9	円形・楕円形	19～54	10～66		SE50→本誌 SD8と新旧不明
5	F7h0～F7i0	4×6	13	円形・楕円形	20～38	11～75	縄文土器 土師器 須恵器	
6	F8a4～F8b6	9×5	8	円形・楕円形	15～30	9～39	縄文土器 土師器	SD8・SF4 と新旧不明
7	G7b8～G7c0	9×8	5	円形・楕円形	25～34	17～56		SK865と新旧 不明

(7) 遺構外出土遺物 (第57～60図)

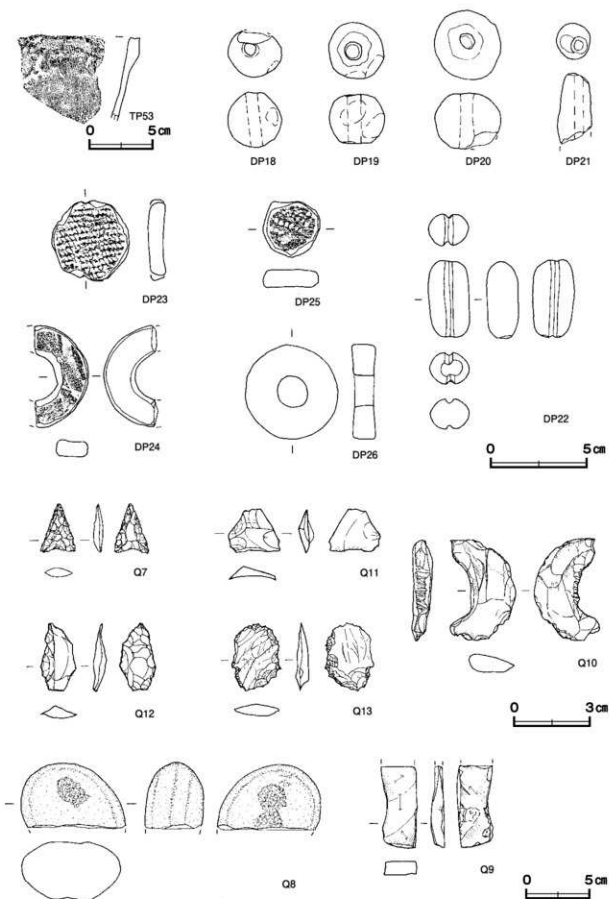
遺構に伴わない主な遺物について、実測図及び観察表に掲載する。



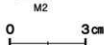
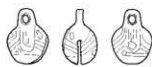
第 57 图 遺構外出土遺物跡実測図 (1)



第58图 遺構外出土遺物跡実測図(2)



第 59 图 遺構外出土遺物跡実測図 (3)



第60図 遺構外出土遺物跡実測図(4)

遺構外出土遺物観察表(第57～60図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
33	縄文土器	深鉢	-	(33)	(7.5)	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	外・内面に垂痕文 胴部下端に隆帯し爪形文	表土	5%
34	縄文土器	深鉢	-	(5.7)	(10.2)	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	縦位回転の単節縄文LRを施文 区画内をすり消し	表土	10%
35	縄文土器	深鉢	-	(3.2)	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	尖状	SK897	5%
36	縄文土器	深鉢	-	(6.9)	-	長石・石英	明赤褐	普通	天狗鼻状の鋭角な尖底	SI55	10%
37	縄文土器	深鉢	-	(2.7)	-	長石・石英	明赤褐	普通	先端 外・内面に条痕文	表土	10%
38	縄文土器	有孔器 土釜	-	(4.9)	-	長石・石英・雲母	褐	普通	弁形口の隅を流らす 丁寧なナゲ調整	表土	5%
39	弥生土器	壺	-	(2.2)	(8.0)	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	底面に木葉痕 附加条二種(附加1条)縄文	SI57	5%
40	弥生土器	壺	-	(2.6)	8.4	長石・石英	にぶい褐	普通	底面に木葉痕 附加条二種(附加1条)縄文	表土	10%
41	土師器	坏	[138]	(4.1)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	ロウロ成形	SK821	10%
42	土師器	高台付坏	-	(1.6)	(6.6)	長石・石英・赤色砂子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	SK809	10%
43	土師器	高台付坏	-	(2.5)	-	長石・石英・赤色砂子	浅黄橙	普通	外面摩耗	SK821	10%
44	土師器	埴	-	(5.9)	2.6	長石・石英・雲母	橙	普通	赤彩※ 外面へう閉り	SK856	30%
45	土師器	壺	[21.6]	(3.0)	-	長石・石英・白色砂子	明赤褐	普通	赤彩 複合口径 ハケ目調整	SI58	5%
46	土師器	甕	[15.8]	(4.7)	-	長石・石英・白色砂子	にぶい褐	普通	胴部外面へう閉り 内面指頭押圧	SK831	10%
47	土師器	手捏土器	[5.6]	(4.0)	-	長石・石英	橙	普通	指頭押圧	SK897	20%
48	土師土器	小皿	7.6	2.0	6.0	長石・石英	橙	普通	ロウロ成形 底部回転糸切り 内底面外周部に凹み	表土	90% PL.7

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
49	陶器	小碗	[8.0]	3.9	[3.6]	緻密 灰青	秋びぬ文 外・内面に施施	灰青	瀬川伊達系	SK799	40%
50	磁器	小坏	6.6	2.6	2.4	緻密 灰白	高台に口の字文 底面に「万代」「他」	透明	鹿島系	表土	90% PL.7

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP32	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	明赤褐	口縁部に櫛歯文 胴部に貝殻波状文	SK805	PL.8
TP33	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	褐	手轆竹管状工具による転削沈縄文を縦位に施文	SK897	PL.8
TP34	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	褐	沈澱による区画内に単節縄文LRを施文	SK836	PL.9
TP35	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	赤褐	交互斜突による連続コの字状文 縦位の標本文を施文	SK897	PL.8
TP36	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	黒褐	磨り消し縄文 隆帯に斜突列	SK897	PL.8
TP37	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	明褐	縦位回転の単節縄文LRを施文 隆帯と沈澱による渦巻状文	SI55	PL.9
TP38	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	口唇部に矢羽状の集合沈澱文 口縁部下端に平行沈澱	SI55	PL.8
TP39	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	明褐	流注口縁 条痕文	SK849	PL.9
TP40	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐	流注口縁 龍帯部に隈み目 竹管状工具による斜突 外・内面に条痕文 外面に棒状工具による斜突	SK837	
TP41	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	変形爪形文	SK805	
TP42	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色砂子	橙	口縁部に2本単位の櫛歯文 胴部に貝殻波状文	SK729	
TP43	縄文土器	深鉢	長石・石英	赤褐	縦位回転の単節縄文LRを施文 隆帯と沈澱による渦巻状文	SK811	PL.8
TP44	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色砂子	橙	棒状工具による内形削突文を施文	SI55	PL.7
TP45	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色砂子	褐	沈澱による区画内に単節縄文LRを施文	SK805	
TP46	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色砂子	にぶい橙	太沈澱による区画内に単節縄文LRを施文 沈澱間磨り消し	SK811	

番号	種別	器種	胎土		色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP47	縄文土器	深鉢	長石・石英		にぶい褐色	単胎縄文LRを施文	SK796	
TP48	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母		赤褐色	縦位回転の単胎縄文LRを施文 へう状工具で沈漚による区画 区画内を磨り出し	SI58	PL 8
TP49	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母		明褐色	流状口縁 口縁部に刺突文	SK805	
TP50	縄文土器	深鉢	長石・石英		明赤褐色	斜位回転の単胎縄文RLを施文	SI57	
TP51	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母		明赤褐色	沈漚による区画 区画内に縄文	SK796	
TP52	弥生土器	壺	長石・石英		にぶい褐色	斜格子目文	SI56	
TP53	土師器	鉢	長石・石英		橙	外・内面ハケ目調整	SK833	

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP18	土玉	29	29	0.7	(1845)	長石・石英・ 雲母・赤色粒子	にぶい赤褐色	表面摩耗 一部欠損 一方からの穿孔	SK788	
DP19	土玉	30	26	0.9	(2313)	長石・石英・ 赤色粒子	にぶい橙	表面摩耗 一部欠損 一方からの穿孔	SK801	
DP20	土玉	37	30	0.8	(3358)	長石・石英・ 赤色粒子	赤褐色	表面摩耗 一部欠損 一方からの穿孔	SK833	
DP26	戸草	49	12	1.7	4414	緻密	灰白	磁器 片面保存着	表土	瀬戸光造 PL10

番号	器種	長さ	幅	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP21	管状土師	(3.7)	1.9	0.5	(1031)	長石・石英・ 赤色粒子	にぶい橙	表面ナゲ調整 一部欠損	SD 8	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP22	有溝土師	4.1	2.1	1.7	15.34	長石・石英・ 雲母・赤色粒子	にぶい橙	周縁部に挟り	表土	PL10
DP23	土器片断	4.3	4.1	1.0	19.09	長石・石英・ 赤色粒子	にぶい褐色	両端部に挟り	SD13	PL10
DP24	土器片断	5.4	(2.8)	0.9	(1333)	長石・石英	褐色	周縁研削調整 一部欠損 孔径 2.5cm	SK668	
DP25	土器片断	2.9	3.0	1.0	10.66	長石・石英	明黄褐色	周縁研削調整	SK831	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 7	石鏝	1.9	1.4	0.4	0.76	チャート	凹基無茶鏝 両面調整	表土	PL10
Q 8	凹石	(5.2)	(8.3)	4.6	(2917)	安山岩	両面に3ヶ所の断面階状の凹みを有する	SI56	
Q 9	砥石	(6.5)	2.8	1.1	32.38	凝灰岩	2面使用	表土	PL10
Q10	勾玉	4.0	2.6	0.8	7.97	滑石	腹面に調整痕 未成品	SK809	
Q11	割片	1.7	2.1	0.6	1.12	頁岩	片面中央に挟	SI58	
Q12	割片	2.7	1.4	0.6	1.56	チャート	片面中央に挟	SK821	
Q13	割片	2.7	1.9	0.5	2.37	ホルンフェルス	周縁部に両面からの加工	SI56	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M2	鈴	2.2	1.3	1.6	6.28	銅	表面に刷目目 上部に穿孔	SD11C	

番号	銭種	径	孔幅	厚さ	重量	材質	初鋳年	特徴	出土位置	備考
M3	寛永通宝	2.52	0.58	0.15	3.11	銅	1774年	銅一文銭 正字	SD14	PL10

第4節 ま と め

1 はじめに

大谷貝塚は、平成18～20年度の調査で縄文時代から近世までの複合遺跡であることが明らかにされている。以下、今回の調査結果に基づいて、各時代の遺構と遺物について概観し、まとめとしたい。

2 縄文時代

今回の調査で当時代の遺構は、標高25mの台地平坦部から緩斜面部にかけて陥し穴3基、土坑9基を確認できた。これらの遺構からは、中期後半に比定できる土器を中心として、早期後葉から中期後半までの土器が出土している。当財団文化財調査報告「第317集」及び「第330集」において、竪穴建物跡12軒、炉穴9基、炉跡2基、陥し穴1基、土坑440基、斜面貝層1か所、土坑墓1基、ピット群2か所が報告されている。早期後葉の遺構としては、第4号陥し穴や第729・802号土坑が該当する。平成20年度の調査区域に早期後半の土器片を伴う炉穴5基を確認しており、当該期の集落が営まれていた痕跡が認められる。本調査区域にも同時期の営みが明らかになった。中期後半の遺構としては、第806・808・811・840・844・848・874号土坑が該当する。これらの土坑は、平成18～20年度の調査で確認できた谷津を囲むように配置されており¹⁾、集落の外縁部にあたると考えられる。当調査区域の台地南側まで、集落の活動範囲が広がっていたと考えられる。

3 弥生時代

今回の調査で当時代の遺構は、標高25mの台地平坦部に竪穴建物跡4棟、土坑2基を確認できた。第42・50・55号竪穴建物跡は調査区域中央部、第52号竪穴建物跡は調査区域南端部に位置する。

(1) 竪穴建物跡について

第42・50・55号竪穴建物跡の平面形は隅丸長方形である。第50・52・55号竪穴建物跡の時期は、出土土器から後期後半に比定できる。第42号竪穴建物跡もその配置から、第50・52・55号竪穴建物跡と同時期に存在していた可能性がある。第55号竪穴建物跡(床面積428㎡)の大型建物跡を中心に第42・50号竪穴建物跡(床面積21.0㎡・10.0㎡)が付属する「単位集団」として構成されていた可能性がある²⁾。

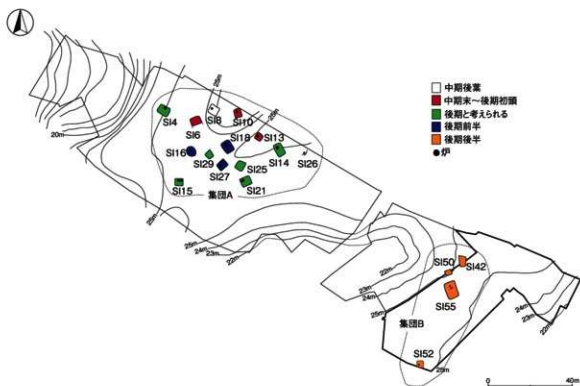
(2) 出土土器について

第55号竪穴建物跡から出土した7・8は、県南部の根拠北式に比定できる。この土器群の特徴は、縄文施文の単純口縁に2列の刺突列を巡らしており、頭部も縄文が施され、無文帯を挟んで胴部にも縄文が施文される。刺突の間や上段の刺突直下に縦長の貼瘤を有するものもあるが、7・8にはない³⁾。また、8は胴部下端に指ナデによって縄文を磨り消した痕跡があり、霞ヶ浦南岸から下総北部で出土する土器の特徴を備えている⁴⁾。

(3) 集落の様相について

今回の調査で確認された4棟の竪穴建物跡(集団B)は、標高25mの台地平坦部で確認できた。平成18・19年調査で確認された14棟の竪穴建物跡(集団A)と同じ標高の台地上である。集団Aの時期は中期末葉から後期前葉とみられる⁵⁾。今回の調査区域で確認された集団Bの時期は、前述したように後期後半と比定できる。集団Aと集団Bが営まれた時期に時間差があることから、一つの集落を形成していた

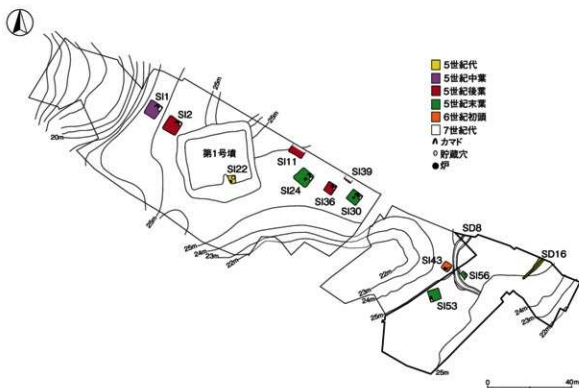
とは言い難い。大谷貝塚の北西方向約500mに位置する沢田古墳群でも後期前半の第1・2号竪穴建物跡と、後期後半の第3号竪穴建物跡が確認されている。狭い範囲で時期の異なる集落が小規模ながら形成されたと推定されており⁶⁾、大谷貝塚においても時期の異なる、継続期間の短い小規模集落が営まれていたと考えられる。



第61図 弥生時代の遺構配置図

4 古墳時代

今回の調査で当時代の遺構は、標高25mの台地平坦部から緩斜面部にかけて、竪穴建物跡2棟、溝跡2条を確認できた。第53号竪穴建物跡は、出土土器から5世紀末葉に比定できる。その遺構の形態は、竈の煙道部が壁まで掘り込まれていない、いわゆる初期竈であり、竈の南側に隣接するコーナー部に貯蔵穴を設けている。また、4か所の主柱穴と壁溝を有している。平成20年度の調査で確認された第43号竪穴建物跡が隣接しており、類似する点がある。さらに、建物の廃絶時、遺棄された滑石の剥片58点(30296g)が出土している。平成18～20年度の調査で確認された第24号竪穴建物跡で滑石片114点、第30号竪穴建物跡で滑石片2点、第43号竪穴建物跡で白玉17点と滑石片53点(57265g)が出土している。当貝塚の北西方向に所在する沢田古墳群の第1号墳では、滑石片21点が旧表土面上に散在していた。当村内の野中遺跡でも竪穴建物跡4棟から滑石製造物29点(双孔円板3、未成品26)が出土していることから⁷⁾、建物の廃絶時に破片状の滑石を撒くという行為に、祭祀的な意味があると推測できる。平成18・19年度調査で確認された第1号方墳は、7世紀後半に築造されたと推測でき、今回の調査区域で同時期に該当するのは、第8号溝跡である。第8号溝跡からは、湖西窯産の高坏脚部や猿投窯産のプラスチック瓶頸部の破片が出土している。当地において、東海地方との交流や物品の流通があった可能性がある。



第62図 古墳時代の遺構配置図

5 室町時代

今回の調査で当時代の遺構は、標高22～24mの台地斜面部に、地下式坑1基、溝跡1条、土坑1基を確認できた。平成18・19年度調査において、塚1基、溝跡5条、道路跡3条、土坑墓2基、円形周溝跡1基が確認されている。これらは葬制や信仰に関連する遺構をはじめ、道路や溝等の交通や生産・生活に関連する遺構である⁸⁾。今回の調査区域で確認された第7号溝跡や第788号土坑からは銅や焙烙等の土師質土器片、平碗等の陶器片が出土している。地下式坑の性格については、埋葬施設や貯蔵施設等が考えられている。当時代の遺構について、その性格を決定づける遺物は出土しなかったが、平成18・19年度調査で確認された中世以降の様相が、今回の調査区域まで広がっていたことが判明した。

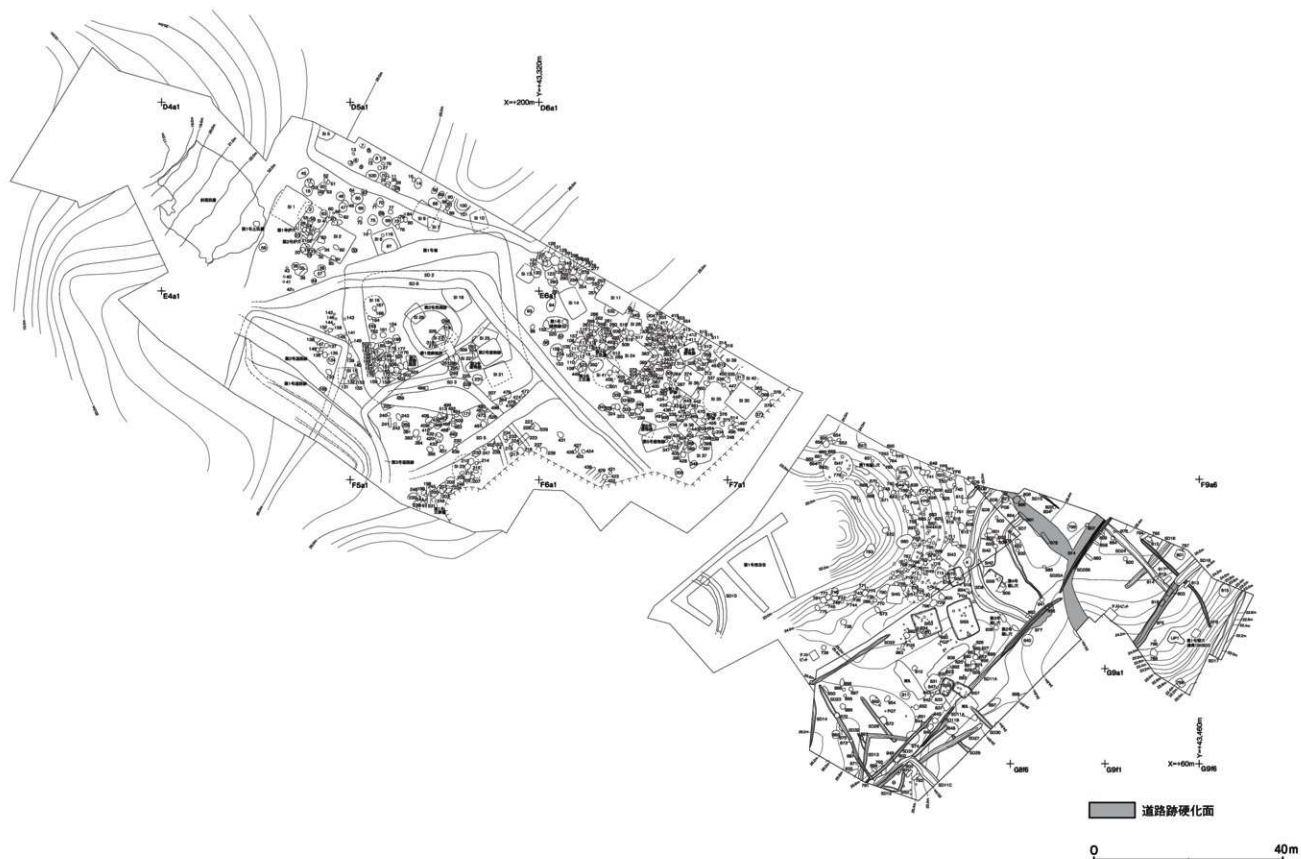
6 おわりに

今回の調査によって、谷津に面した台地縁辺部が縄文時代早期後葉から中期後半、弥生時代後期後半、古墳時代中期及び室町時代において、人々の生活領域であったことが明らかになった。弥生時代後期後半の集落が台地南東側でも確認できたこと、古墳時代の集落において建物廃絶時に滑石片を撒くという当村内の野中遺跡との共通点が見出されたことは注目される。

今後、当貝塚を含めた周辺地域の調査研究が積み重ねられることによって、筑波・稲敷台地における人々の生活の様子が、解明されることを期待したい。

註

- 1) a 駒澤悦郎 成島一也 作山智彦「大谷貝塚 国道125号大谷バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2」〔茨城県教育財団文化財調査報告〕第317集 2009年3月
縄文時代における大谷貝塚の土地利用の変遷について、早期後葉から後期前半までの間、断続的に土地利用が繰り返され、中でも主体となる時期は中期後葉であると述べている。
- b 櫻井完介「大谷貝塚2 国道125号大谷バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3」〔茨城県教育財団文化財調査報告〕第330集 2010年3月
平成18～20年度調査で確認できた竪穴建物跡やフラスコ状土坑は、谷津を囲むように台地の縁辺部に散在していると述べている。
- c 瓦吹堅「茨城県における縄文時代集落の諸様相」第1回研究会集基礎資料集「列島における縄文時代集落の諸様相」縄文時代文化研究会 2001年12月
中期の集落跡について「もっとも集落規模が拡大する時期は加曾利EⅡ～EⅢ式期であり、その時期の集落跡のほとんどは住居跡や土坑が弧状あるいは環状に分布し、遺跡によっては加曾利EⅣ式期で消滅する遺跡や新たに集落が形成される遺跡もみられる。」と言及している。
- 2) a 設楽博己 藤尾慎一郎 松本武彦「集落からよむ弥生社会」〔弥生時代の考古学8〕同成社 2008年9月
近親関係にある複数の世帯からなる「世帯共同体」というまとまりのなかの一つの住居が、しばしば特別に大きいことを挙げている。
- b 川井正一ほか「茨城県史料 考古資料編 弥生時代」茨城県 1991年3月
小規模集落は、一つないし二つの「単位集団」（もしくは「世帯共同体」と呼ばれる小グループ）によるもの、と述べている。
- c 海老澤稔 黒澤春彦「土浦市原田遺跡群～新治台地の大集落～」〔茨城県における弥生時代研究の到達点～弥生時代後期の集落構成から～〕茨城県考古学協会 1999年10月
原田遺跡群の集落変遷において、各期におけるグループの中心となる大型竪穴建物跡の存在を挙げている。
- 3) a 関口満 福田礼子 古沢悟 日高慎「根鹿北遺跡・栗山原跡発掘調査報告書」〔土浦市今泉霊園拡張工事事業地内埋蔵文化財調査報告書〕土浦市遺跡調査会 1997年3月
- b 黒澤春彦「根鹿北遺跡～原田遺跡群の周辺遺跡～」〔茨城県における弥生時代研究の到達点～弥生時代後期の集落構成から～〕茨城県考古学協会 1999年10月
貼瘤のある土器となない土器の遺構内での共存する例から、「貼瘤の有無については、時間差によるものと考えられる。」と述べている。
- 4) 中村哲也 川村勝 小玉秀成 牛山英昭 黒沢浩「根本遺跡」〔陸平研究所報告〕2 美浦村・陸平調査会 1996年3月
大谷貝塚の北東方向約4kmに位置する根本遺跡では、第4・6・12・24号竪穴建物跡から出土した弥生土器の底部周辺にナデ調整が施されており、類似性がみられる。
- 5) 註1 aと同じ。
- 6) 木橋弘巳「沢田古墳群 国道125号大谷バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1」〔茨城県教育財団文化財調査報告〕第276集 2007年3月
- 7) 中村哲也「野中遺跡 第2次発掘調査報告書」〔美浦村教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告〕8 美浦村教育委員会 2000年3月
- 8) 註1 aと同じ。



第 63 図 大谷貝塚遺構全体図

写 真 图 版



第53号竖穴建物跡出土遺物



調査区遠景（北から）



調査区全景

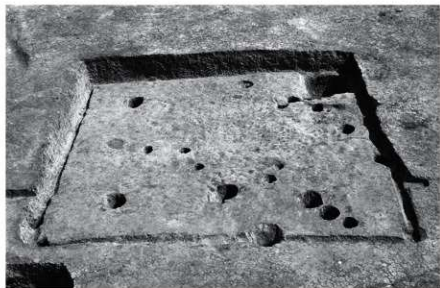
PL2



第55号竖穴建物跡
完掘状況



第53号竖穴建物跡
竈遺物出土状況



第53号竖穴建物跡
完掘状況



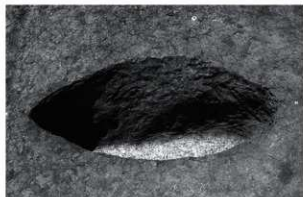
第56号豎穴建物跡
完掘狀況



第58号豎穴建物跡
完掘狀況



第1号地下式坑
完掘狀況



第2号陥し穴完掘状況



第729・796・805号土坑完掘状況



第848号土坑完掘状況



第792号土坑完掘状況



第788号土坑完掘状況



第7号溝跡遺物出土状況



第16号溝跡完掘状況



第6号道路跡掘方完掘状況





第53号竖穴建物跡出土土器



第50号竖穴建物跡，第729・792・802・806・811・840号土坑，遺構外出土土器



遺構外-TP32



遺構外-TP36



遺構外-TP35



遺構外-TP33



遺構外-TP43



遺構外-TP38



SK811-TP13



SK808-TP11



SK874-TP24



遺構外-TP48



SK848-TP23



SK848-TP22



第811・844号土坑、遺構外出土土器



SI 53-DP 4~16



SK808-DP 2

遺構外-DP23

SK808-DP 1



遺構外-DP22

SI 53-DP17

SI 50-DP 3

遺構外-DP26



遺構外-Q7

SI 53-Q5



SI 55-Q2

遺構外-Q9



SD8-M 1

遺構外-M3

抄 録

ふりがな	おおやかいづか							
書名	大谷貝塚3							
副書名	国道125号大谷バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書4							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告第401集							
著者名	木村光輝							
編集機関	公益財団法人茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行日	2015(平成27)年3月16日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
大谷貝塚	茨城県稲敷郡美浦村大谷965-2番地ほか	08442 - 109	35度 59分 59秒	140度 18分 53秒	22 ~ 25 m	20120401 ~ 20120628	3,000 m ²	国道125号大谷バイパス建設事業に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
大谷貝塚	集落跡	縄文	陥し穴 土坑	3基 9基	縄文土器(深鉢)、土製品(土器片・土器片円盤)、剥片			
		弥生	堅穴建物跡 土坑	4棟 2基	弥生土器(壺)、土製品(紡錘車)、石器(磨製石斧・敲石・凹石)			
		古墳	堅穴建物跡 溝跡	2棟 2条	土師器(坏・高台付坏・埴・器台・高坏・鉢・甕・甌)、須恵器(高坏・プラスチック瓶・甕)土製品(土玉・管状土器・土器片・土器片円盤)、石製品(有孔円板未成品)、剥片(滑石)、鉄製品(小刀)			
		室町	地下式坑 溝跡 土坑	1基 1条 1基	土師質土器(小皿・鍋・焙烙)陶器(碗・皿)			
	その他	時期不明	堅穴建物跡 堅穴遺構 溝跡 道路跡 土坑 ピット群	2棟 1基 21条 4条 95基 5か所	縄文土器(深鉢・有孔鈎付土器)、弥生土器(壺)、土師器(坏・高台付坏・埴・高坏・甕・手捏土器)、土師質土器(小皿)、陶器(小碗)、磁器(小坏)、土製品(土玉・土器片・管状土器・有溝土器・土器片円盤・戸車)、石器(鐵・凹石・砥石)、石製品(勾玉未成品)、剥片、銅製品(鈴)、銭貨(寛永通宝)			
要約	縄文時代、弥生時代、古墳時代の集落跡及び室町時代にも人々の生活領域であったことが確認できた。谷津に面した台地縁辺部に集落が断続的に形成されていたことが明らかとなった。							

印刷仕様

編集	OS	Microsoft Windows 7 Home Premium ServicePack1
編集		Adobe InDesign CS5
図版作成		Adobe Illustrator CS5
写真調整		Adobe Photoshop CS5
Scanning		6×7 film Nikon SUPER COOLSCAN9000 画面類 EPSON ES-G11000
使用Font	OpenType	リュウミンPro・L
写真	線数	モノクロ175線以上 カラー210線以上
印刷		印刷所へは、Adobe InDesign CS5でレイアウトして入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第401集

大谷貝塚 3

国道125大谷バイパス建設事業
に伴う埋蔵文化財調査報告書4

平成27(2015)年 3月13日 印刷

平成27(2015)年 3月16日 発行

発行 公益財団法人茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2

茨城県水戸生涯学習センター分館内

TEL 029-225-6587

H P <http://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 山三印刷株式会社

〒311-4153 水戸市河和田町4433-33

TEL 029-252-8481